イワシ嬢

Ⅰ
レディ・サーディン・・・・・・・・
タコとり・・・・・・・
電撃ジャック・・・・・・・
オーヴァー・マイ・ヘッド・・・・・・・・
Ⅱ
メリケン波止場・・・・・・・・
銀座物語・・・・・・・
金の鱒、銀の鱒・・・・・・・
牛の背中・・・・・・・
僕の夏にはアズキアライと極楽鳥がいる・・・・・・・・
Ⅲ
びんぼう神・・・・・・・
おばけ煙突・・・・・・・
白ネギとアゲの味噌汁・・・・・・・
しんしん記・・・・・・・
自殺志願　Starship Trooper・・・・・・・

レディ・サーディン

彼女は頭の上に貝がらを乗せていた。そしてふるさとの潮風と、夕ぐれ時の波の音を想いながら生きていた。海は遠かった。

さて、僕は不貞腐れたように駅前の歩道橋の横に座りこんでいた。実際、不貞腐れていた。頭のてっぺんからつま先の先まで、びしょ濡れである。今日は朝中大雨であったのに、僕は傘を持っていなかったのだ。天気予報が嘘を吐いたのだった。あまりに腹が立ったので、僕は傘を買わずに歩道橋の横に座り込み、雨つぶてが僕の全身を縦横無尽に殴るのを傍観していた。僕は空に抗議していたのだった。こんな間抜けな雨に屈してたまるか。

駅前に聳え立っている時計台が一二時を叫んでから暫くして雨があがり、今にいたる。前髪からしずくがぽとり、ぽとりと滴っては、まつ毛にひっかかって煌いている。僕はそれを拭うのも億劫になって、ぼんやりと車のエンジンが唸る音を聞いていた。

と、ふと、道の向こうから、一風変わった女の子が歩いて来るのが見えた。水色のスカーフを首に巻き、メキシコ風（上手く説明できないが、兎に角メキシコ風なのである）のスカートをまとって、茶色の紙ぶくろ（中身は焼きたてのパンだろうか）を抱えている。そして、少し赤みがかった髪の毛にバンダナを巻き、その上に大きなまき貝の貝がらを乗せていた。最初僕は、変な帽子だなぁ、と思っていたが、彼女が近づくにつれ、それは帽子などではなく本物の貝がらである事に気付き、少し驚いた。

そしてさらに驚いたことに、彼女は「おや？」という顔つきをして僕の前に立ち止まり、少し首をかしげた後にこんなことを言ったのである。

「つかぬことを伺いますけど、あなたは半魚人か何か？」

「いや、違う」と僕は面くらいながら答えた（なにしろ生まれて初めてされた類の質問だったので）。「ただの人類だ」

「あら」と彼女は赤面した。

「ごめんなさい。あんまりあなたが水っぽいから、海の中に住んでる生き物かと思って・・・・・」

「これは雨水です」と僕は落ち着いて答えた。「傘を忘れたので、こんな有様に」

「そうか、人類ですかあ」彼女はしばらく思案した後、こう言った。「ねえ、水中生物じゃないんだったら、そのままじゃ風邪をひいちゃうよ」

「だろうね」

「だろうね、じゃないわよ。下手すれば肺炎になるわよ」

「だろうね。」僕は肩をすくめた。

彼女が口をつぐんだので、僕は勇気をふりしぼり尋ねた。「それより、君に尋ねたいんだけど」

「何？」と彼女。

「その、頭の上へのっけているものは何だい」

「これ？」（と彼女は頭上を指差してみせた）

「そう、それ」

「これは、貝がらよ！」彼女は誇らしげに宣言した。
「だと思った」僕はもう一度肩をすくめた。そりゃあ、貝殻だろうな。見ればわかる。
「さて、君は誰だ？宗教の勧誘か何かかい？」僕はすくめたままの肩を揺すりながら言った。
「違うわよ」と彼女。
「ま、とにかくついてきなさい。肺炎にかかりそうな人を見殺しにはできないわ」

♪♪♪

僕は熱いシャワーを浴びた後、彼女が用意した不思議な服（ポンチョのような）をまとって、イスに腰かけている。机の上には白い砂が詰められたビンが置かれ、天井からは奇妙に長い魚の干物がぶら下がっている。ペン立てやくずかご、ＭＤのボックス（当時はまだｉポッドがなかった）などには、色とりどりの小さな貝がらが綺麗に貼りつけられていた。そして、さっき彼女が頭の上からおろした貝がらがぽつねんと、部屋の真ん中におかれていた。
「お待たせ」彼女がお盆を運んで来た。「どう、そのポンチョは？」
「なかなかいいよ」と僕。お盆の上にはツナ・サンドとオリーブの酢漬け、それにジンジャーエールが乗せられていた。「ありがとう」僕は丁寧におじぎをした。「おぉ、ジンジャーエールか。僕にはジンジャーエールが好きな親友がいてね」と僕は言った。「ジンジャーエールは完璧にして最高の唯一の飲みものであると言ってたな」
言い終わらないうちに胃袋が情けなく音を立てた。あまりに情けない音だったので僕等は笑った。
「胃袋は雄弁ね」と彼女。
「それはそうとして」僕は天井からぶら下がっている、さっきから気になっていた物体を指差した。「これは一体なんなんだい」
「これは、私の故郷にしかいない魚の干物なの」彼女は指でぽんぽんとその物体をはじいてみせた。
「なんていう魚？」
「さあ。名前は知らない。みんなはナガウオって呼んでた」
「名前と言えば、」と言いつつ僕はツナサンドに手をのばそうとして、上目遣いに彼女を見た。“どうぞ”と手で合図され、僕はそれを頂いた。
「名前と言えば、何？」と彼女もサンドを食べながら言った。
「名前と言えば、まだ君の名前を聞いてなかったな」
彼女は名を名乗り、その後で「でもみんなからはサーディンって呼ばれてる」と補足した。
「いわしちゃん、ってわけ？」
「うん、そうよ」
「サーディンか。」
僕はしばらく舌の上でその言葉を転がしてみた。サーディン、サーディン、サーディン・・・・・・・・・・・・・・・。
そして、オリーブの酢漬けを一粒つまみ上げ、今度はそれを転がした。
「海が好きなのよ」サーディンは言った。
「故郷は港町なの。よく子供の頃は屋根の上へ上って一日中海を眺めてたっけ。ねぇ、」サーディ

ンはひとつサンドイッチをつまんだ。「ちょっとおかしいでしょ？一日中海を眺めてて飽きないなんて」
「いや、そんな事ないよ」ショウガの香りを吸いこみながら僕は答えた。
「だって海は一瞬たりとも、表情を変えないでいる事はないからね。どんなに静かな時でも小さな波は走ってるし、太陽の光が水面を転がっている。」
サーディンはうれしそうに微笑んで、話し続けた。
「海を見ながら色んなことを考えた。自分の将来のこと、とるに足らない悩みごと、忘れかけたこと、今どこかで生きている誰かのこと、それにまあ、いかにも少女が憧れそうな夢想、でもそうやって考えたことを人に話そうとしても、ノートに書きとめようとしてもどうしても上手くいかなかったよ」
「語ることが大きすぎて、語れないんだよ」と僕。
「結局だまってるのが一番のおしゃべりってことかも」とサーディン。
「かもね。」と僕。

それからツナサンドがなくなってからも、僕等は飽きることなく語り続けた。彼女は、自分は潮風のことばがわかり、魚とテレパシーで対話できるのだと話した。
「学校に行く時に、いっつも海岸沿いの道を通ってて、そこはいっつも潮風が吹いてるわけなんだけど、時々声がフッと聞こえるのよ。“今日は雨が降るぞ”とか、“やっと春めいてきたな”とか。ずいぶんと長い間、一体誰が私に話しかけてるんだろうって思ってたんだけど、今思うとあれは潮風のことばだったのね」
「潮風と友達だったのか。魚たちとも仲良やっていた？」空っぽになったオリーブの瓶を目の前にかざして、僕は尋ねた。
「魚たちは最もよい親友だったの」とサーディン。
「こんなに大きい（と彼女は両手を広げてみせた）魚から、こんなに小さい魚まで（と彼女は指で5センチくらいの長さを示した）色んな子がいた。
私はいつの間にか、その子たちと心を通わすようになったの。でもそう言うと、魚には心なんてないって笑い飛ばす人がいるんだけど、どう思う？」
「そうやって笑い飛ばした奴こそ、心がないんだろうよ」と僕は言った。
「そうよね！」とサーディンは言って、僕の手からオリーブの空き瓶を取った。オリーブの瓶は昼の陽光を集めて、不思議な光を放っていた。

「魚たちはやさしいわよ」サーディンは言った。
「子どもの頃は毎日が退屈で、しょっちゅう海へ行った。でも私はあんまりよくは泳げなかったんで、浅瀬でパチャパチャやってただけなんだけどね。それがとりとめもなく砂浜のヤドカリやカニ、それに水の中で出会った魚達に心の中であいさつしてた。“こんにちわ、カニさん、今日も素敵なハサミですね”って具合に。」
「そうしたら、彼等は返事を返すようになったと。」
「そういうことね」とサーディン。
「最初に返事をしてくれたのは、タコだった。砂からずるずるっと出て来たところに、私が通り

かかったの。たしか小学校の三年の時だったかしらね、それは。私はそのタコさんに向かって“こんにちは、たこさん。お出かけですか？”と話しかけた。そうしたら、“嬢ちゃん、まさか俺をとっつかまえて食おうなんぞと考えちゃいないよな”って声が、私の頭の中に聞こえてきたの。」

「魚介類の精神感応！」僕は歓声を上げた。

「それ以来ね。ありとあらゆる海の生き物と対話できるようになったのは。」とサーディン。

「あの名前を知らない黄色い三角形の魚、それに岩にはりついてた藻とはよく一緒になぞなぞをして遊んだものよ。それから意外なことに、貝は本当はとっても雄弁なのよ！せっせと砂出しをしながら私に自分の生涯について語ってくれたわ。イカはたくさん古い歌を知っていて、トビウオはとっても冗談がうまかった。二人がそろうとちょっとしたラジオ・ショーのはじまりよ。ヤドカリは少しつっけんどんで、でも何かと私を気にかけてくれて・・・・・・。」

「その頭の貝ガラは、彼からもらったものかい？」と僕。

「そうよ」パチンと彼女は手をたたいた。「中学入学のお祝いにね」

「ファンタスティックだね」

「今でも魚を見たら、ついつい話しこんじゃうよ。」

そう言って彼女は大笑いした。

「魚と会話するなんて、とても奇妙に思えるでしょう。でも、私にとってはそれはあまりにも自然なことで・・・・・・。私は全然不思議だと思っていなかったし、今も思っていないよ」

そして、彼女は少し哀しく笑って言った。

「町を出る時、私がお別れを言った相手は、魚たちだけだった」

気持ちのよい午後だった。僕とサーディンは、この世界の全てを語りつくしてしまいそうな勢いで、お喋りを楽しんだ。気がつくと、ジンジャーエールのおかわりもなくなり、もうすぐ日が暮れようとしていた。今、彼女のふるさとでは風が凪いでいるのだろうか…僕はそんな事を考えた。

僕は、サーディンが頭の上へ乗せていた貝がらに手を伸ばした。その貝がらは、かすかにサーディンの髪のにおいがした。僕はれをそっと、耳へ当ててみた。

波の音がした。

「それは、わたしのふるさとの音」とサーディンは言った。

耳をすませていると、いつの間にかここはサーディンの部屋ではなくなり、美しい夕暮れの海辺に変わっていた。僕とサーディンは砂浜に腰かけて、目の前へ広がる大きな海をしばし無言で見つめていた。

「君がなぜこれをいつも頭の上に乗せてたのか、わかったよ」と僕は言った。

そう、彼女は頭の上に貝がらを乗せていた。そしてふるさとの潮風と、夕ぐれ時の波の音を想いながら生きていた。

素敵なことだ。

（二〇〇三年五月二十三日）

タコとり

ジョウジの家は海の近くにある。そこへ着いたのは午後五時頃のことだった。
ジョウジは玄関のドアのところへもたれて待っていた。街に絶えず吹いていたのは海風だったのだろうか。明るい光を放っている太陽が、水平線の向こうに沈みかけていた。
ジョウジは僕に気付くと、ニヤリと笑って言った。「よぉ、家出少年さん」
「悪いな、突然」僕はきまり悪く笑って言った。
「いい、いい。どうせ俺はヒマだから。まぁ入れよ」ジョウジがドアを開いた。

「それで、これからどこへ行くつもりなんだい？」とジョウジ。
「まだ全然決めてないよ」と僕。「あんまり遠くへ行くつもりはないけどね」
僕等はまずキッチンへ直行した。
「あのオンボロ自転車で旅しようって思ってるわけかい？」ジョウジが冷蔵庫の中を物色しながら言った。
「うん、当面はな」
「そいつぁあんまりいいプランじゃねぇぞ」ジョウジはビールを二缶ひっぱり出し、そのうち一缶を僕にほうった。
「おお、サンキュー」僕はそれをキャッチした。
「それでは、家出の神様にカンパイ」
「カンパイ」
缶の蓋を開けるプシュッという音がキッチンにこだました。
「そういや、Sがとっ捕まったらしいな」
Sというのは我々共通の友人である。
「えっ？あいつ、何やったんだ」
「河原の、橋げたの陰でシンナー吸ってたのがバレてさ。近所のクソ婆か誰かが学校へ電話して、先生らがかけつけて、現場を押さえちまったんだってさ」
「他に何人くらいいたの？」
「五、六人でたむろしてやってたらしい。」
「いい度胸だな」
「全くな。」
ジョウジは冷蔵庫からもう一本ビールを取り出して、僕にほうった。
「それはそうと、さっきの話の続きだけど」とジョウジ。「あんなオンボロ自転車じゃ、とても旅なんてできやしないよ。俺のバイク貸してやるよ。神のお恵みか、ちょうど一台余ってるのがあるんだ」
「ありがとう。でも僕はバイクには乗れないんだ」と僕。
「大丈夫だよ。俺だって実は無免許なんだ。でもちゃんと乗れてるよ」ジョウジはビールの泡がついた舌をペロリと出した。

僕等は二缶目のビールを手にリビングへ行き、ソファにどっかり座った。(僕はその座り心地のよさにうっとりとなった。なぜだか他人の家にあるソファは高級そうに思える。)
「後ろに女の子を乗せたことは？」と僕。
「は？」とジョウジ。
「バイクの後ろに女の子を乗せたことは？」
「もちろんあるさ」とジョウジ。僕はヒューと口笛を吹こうと思ったが、げっぷがこみ上げてきたので断念した。
「で、どんな子を？」
「そうだな。小さい子で、いっつもミントガムをかんでたっけ。彼女が何かささやくたびに、俺の耳にミントのにおいの息がかかってたのを覚えてるよ」ジョウジはぐいっとビールをあおった。
「お前は、そういう素晴らしい思い出があるかい？」
「ないね」僕は肩をすくめた。
「ま、あせることはない。お前だって、素晴らしい目にあえる日が来るさ、きっと」ジョウジはちょっとオーバーに両手を広げてみせた。
「あせって生きても、のんびり生きても、結果はおなじことだ」

それから僕等はビールを飲みながら、徒然なるままにテレビを見た。ろくな番組をやっていなかった。お笑い芸人たちがはしゃぎながらボーリングをやっていた。
「チャンネル変えろ、ニュースにしよう」と僕。
ニュースでは愛に殉じて自殺した女の子について特集していた。
「絶望のフチに腰かけてる時は、誰しも死が最良の寝場所だと考える」と僕はつぶやいた。
「でも、縄に首をかけてから、それが大していい策じゃないと気付いても遅いのさ」
「それ何の引用だい？」とジョウジ。
「忘れた」と僕。
「とにかく僕にゃ自殺はできないね。机の足に足の小指をぶつけただけでヒイヒイ泣きそうになるってのに、死の苦痛を自分から味わおうなんて気になると思うかい」僕は語りながら、皿の上のサラミソーセージに手をのばした。
「そういう、警句みたいな会話は苦手だな」とジョウジはぶつぶつ独りごちた。

「そうだ、浜へタコをとりに行かないか」突然、ぱっと顔を輝かせてジョウジが言った。
「タコ？タコって、あの」
「そう、八本足のスミ吐き生命体さ」
「そいつは面白いな。どうやって獲るんだ？」
「岩の穴ん中で息をひそめてるタコを、やすで突き刺して穫るのさ。やすってのはでっかいフォークみたいな道具でね。俺は昔、じいさんに連れられてよくタコとりに行ったもんだよ」
そこで俺等は空き缶をゴミ箱へほうりこんで、表へ出た。やすは家の裏へ立てかけてあった。
「お前は、今でもよくタコを穫りに行くの？」
「いいや。何年ぶりかだよ。久しぶりだなあ」よっこらしょとやすをかついで、ジョウジが歩き出した。僕もその後へ続いた。

「じいさんが言うには、タコは夜中になると陸へ上がるんだってさ」とジョウジ。「で、畑へしのびこんで、ナスだのイモだのを盗んで行くんだってさ」
その話は聞いたことがある。タコが畑へやって来て野菜を盗んで行くというのは、有名な言い伝えだ。生物学上はありえない事らしいが。しかし、大量のイモを抱えてあたふた走っているタコに出会えたら、さぞかし愉快な気分になれることだろう。

そして我々は海辺に繰り出し、一時間の格闘の後、三匹のタコをしとめることに成功した。まず最初にジョウジが、そして次に僕が、最後にまたジョウジが岩からタコをひっぱり出した。そして僕らはタコのスミだらけになり、海水でびしょびしょになりながら大声で笑った。岩に腰かけ、ぬめぬめとしたタコをぶちこんだバケツを傍らに置き、海がうねるのを見た。そう、僕らはすっかりびしょぬれだったーでも、少年はそんなことを気にするほど弱虫ではないのだ。
「海は見てて飽きないな、一秒たりとも同じ顔をしない」とジョウジが言った。
「しかし、穫れるものなんだなァ」僕は、このせまい空間からどうにか逃げ出したいとのたうち回っている、哀れなタコを見て、しみじみと言った。
「でも最初は苦労したな、まずどこへタコがいるのかわかんなかったし、見つけても逃げられっぱなしだったし。狙いがはずれて、思いっきり岩をついちまって、あたふたしてる間に悠々と逃げられちまった時なんざ、実にやりきれなかったな」
一匹がスミを吐いた。
「まあでも、予想よりはるかに上手くいったな。大成功だ」
その時、海でしぶきが上った。続いて、エンジンのうなる音がした。白い波がヒコーキ雲のように水面に線を引いて行った。
「モーターボートだ」とジョウジ。「今まで沖で釣りしてた奴等が戻って来たんだろうよ」
モーターボートはほとんど減速しないまま船着き場へつっこむすんでのところで止まった。(ジョウジはそれを見て「ひゃあ、危ねぇ!」と叫んだ)
それから、二人の女の子がぺちゃくちゃと楽し気にしゃべり散らしながら降りて来た。一人は小麦色、もう一人は(海へ出ていたとは思えないほど)白い肌で、二人とも少し赤がかった茶色の髪をしていて、水着の上からTシャツを着ていた。夏の太陽が投げる光を凝縮したような女の子たちだった。信じられないほど、美しかった。
ヒュー、とジョウジが口笛を吹いた、「おい、行こうぜ!」と彼は僕に言った。「行くって、何しに」と僕。「あの笑顔の天使ちゃんとちとおトモダチになりにさ!」
そう言ったとたん、ジョウジはだまりこんで、しげしげと僕をねめ回した。「お前、その汚ないTシャツ、どうにかならないのかよ」タコのスミと海水と砂にまみれたTシャツ。「お前のTシャツだって同じさ」と僕は言った。ジョウジは自分のTシャツを見た。タコのスミと海水と砂にまみれたTシャツ。「弱ったな」とジョウジ。「こんな格好で行ったら、まず九割がたは振られるよ」
「残り一割に賭けてみるか?」と僕は自嘲的に笑った。
その時、ボートから、二人の健康そうでさわやかな男の子が降りて来た。「残り一割の望みも消えちまったな」と僕は言った。ジョウジはぽかんと口を開けたままで彼等を見ていた。
二組のカップルが互いの肩へ手を回し合い、港町の雑踏の中へと消えてゆくのを、僕らは岩に腰かけたまま、少しムスッとして見送った。とてもロマンチックだった夕陽が水平線の向うに隠れ

てしまった今は、海には不気味な闇が充満しているだけだった。
「もうあきらめて帰ろうぜ、ジョウジちゃんよ」と僕は言った。「俺達とあいつらは、どうせ住んでる世界がちがうのさ」
「ザッツ・ライト」とジョウジ。「あいつらは華やかな世界、俺たちはみすぼらしい世界の住人だ。華やかな世界の住人のかたわらには美しい恋人が、みすぼらしい世界の住人のかたわらにはタコがいる」
「タコは食用になるけれども、美しい恋人はならないよ」と僕は言った。
「その通りだな、華やかなやつらはタコを見習え！」そして僕らは根かぎり大笑いした。

それから、家へ帰った。
帰る途中で、ジョウジが気まずそうに切り出した。
「さっきさ、ミントガムの女の子の話したろ？」
「ああ、そう言やしてたな。君も華やかな世界に住んでるってか？」
「いや、そうじゃないんだ・・・・・・あれ、ウソなんだ。」
「ウソ？」
「ああ、ウソ、つくり話なんだ。俺はいまだかつて女の子と二人乗りしたことなんて一度もないんだよ」彼は照れかくしに、赤い舌をぺろりと出した。「すまんな。なんだか一見栄をはりたい気分で・・・・・・」
「気にするなって」僕はおかしくなって笑った。
「それより、早く本物の思い出を作れよ」

ジョウジは、穫ってきたタコを豆といっしょにコトコトと煮こんだ。この料理はじいさんの大好物だったのさ、と彼は言った。タコが煮える前に酔い潰れてしまわないよう気をつかいながら、僕らはのんびりとコップをかたむけた。

こうして、夏の夜は更けていくものさ。

（二〇〇三年七月二十二日）

電撃ジャック

カフェテラス〈ロージー〉は静かな店で、昔ジャズマンだったという白髪のマスターが一人でやっている。カウンターにイスが六つ七つあるだけという、まるで古い陶器に残された小さなキズのように慎ましやかな店だ。

その夜、僕とジョウジはいつものように〈ロージー〉に寄って夜食をとることにした。カウンターの奥にひとりだけ客がいた。ぼろぼろの茶色いシャツを着て、あごひげを胸まで伸ばしたじいさんがひとり。

僕とジョウジはじいさんの隣りへ座った。

「ビールとアボガドサラダ頼むよ」と座るなりジョウジがオーダーした。

「アボガドサラダなんか喰うのか」と僕。

「変かい？」

「さあね。じゃ、僕もビールを」

「つまみは？」とマスター。

「そうさな。ニガウリのソテーをひとつ」

「兄さん方、菜食主義者かい？」とじいさんが言った。

「いいや。雑食主義者だ」と僕。

じいさんはフフン、と笑った。そして、シケモクをポケットから取り出した。

「タバコは？」とじいさん。

「あんたの手の中にあるじゃないか」とジョウジ。

「そんなことはわかっている。タバコいるか？って聞いてるんだよ」

「いや。要らない」

「そうかい」

じいさんは危なっかしい手つきで火を灯し、勢いよく紫色のけむりを天井に吹きつけた。

「ところで兄さん方よ、何か酒のツマミをおごってくれたら、面白い話をしてやるよ」とじいさんは言った。

「どんな話だい？」と僕。

「賭けボクシングのチャンピオンの話だ」

「よし、話してみな」とジョウジ。ひどく退屈だったのだ、僕らは。それに、好奇心も旺盛だった。「マスター、このダディに一番安物のソーセージを食わせてやってくれ」

「ニガウリも早くしてくれよ」

「すまんな」とじいさん。

「いいから、早く話してくれよ、そのボクサーの話を」とジョウジ。

「よし、じゃあ始めるとするか」じいさんは紫煙をカウンターの上へばらまいた。

「俺が若い頃のこと・・・・・・そう、俺にだって若い頃があったのさ・・・・・・俺はよく賭けボクシングを観に行った。裏ではマフィアが絡んでるって噂の、ちょっとやばい試合場へね。そこに出てたボクサーってのはみんなヤクザくずれか、失業して街をうろついていたロクデナシ

のどちらかでね。その中にジャックがいた。そう、この話の主人公、ジャックだ。
　ジャックは大して強そうには見えなかった。ひょろひょろで、手足なんかモヤシみたいでな。でもこいつが滅法強かった。ジャックのパンチを受けた奴は、気がぬけたようにぶっ倒れちまうんだ。何故だかわかるか？」
「わかんねぇな」とジョウジ。
「ヒントをくれ」と僕。
「オーケイ。その試合場では、本当のボクシングはやってなくて、専らベアナックル・ボクシングの試合をやっていた。ベアナックル・ボクシングって知ってるか？」
「ああ、グローブをつけずに、素手でするボクシングのことだろ？」とジョウジ。
「その通り」
「それがどうした？」と僕。
「ジャックは手に、異常に静電気がたまりやすい体質だった。だから、次のパンチを受けた奴等はみんな感電してひっくり返っちまってたんだ」
　ジョウジが思わず吹き出した。「そんなアホな」
「とうとうジャックはチャンプになっちまった。そして、マフィアのボスは、ジャックをもっといい試合場へ栄転させたのさ」
　マスターがじいさんの前へ、色の悪いソーセージが乗った皿を置いた。「おっ、サンキュー」じいさんはフォークを手にとり、僕とジョウジにウィンクした。「いただくよ」
　じいさんはソーセージにかぶりついた。「おっ、こいつぁなかなか・・・・・いけるぞ。オツなもんだ。さて、どこまで話したっけ？」
「ジャックがチャンプになり、ボスに認められて、出世して、もっといい試合場へ出られるようになった、というところまでだ。」
「そうそう。でも現実は非情さ」
　じいさんはフォークを置き、グラスを手にとった。
「栄転した試合場では、本式のボクシング試合をやっていたのさ――つまり、ちゃんとグローブを着用してやるボクシングをね」じいさんは肩をすくめた。
「グローブをはめてちゃ、ジャックの電気は効かねぇよな」
「それで、どうなったんだ？」
「初戦、一〇秒でノックアウトされちまったよ」
　ジョウジが額に手を当てた。「あちゃあ・・・・・・」
「その夜、失意のジャックは飲んだくれてモーテルの部屋へとじこもった。翌朝、奴はバスタブの中で死んでいるのを発見された。そう、ジャックは自殺したんだ
　――自分の両手を、胸の心臓の位置に押し当ててね」

　じいさんはウィスキーをキューッと飲み干した。「どうだ、これがジャックの話だ」
　僕は拍手をし、ジョウジはヒューと口笛を吹いた。
「実に興味深い話だったよ」とジョウジ。
「でもじいさんよー」僕は言った。「それ、つくり話だろ？」
「ばれたか」じいさんは照れ笑いをした。

そして僕らは腹の底から大笑いした。「ああ、もうしょうがねぇなぁ、バレバレだよ、このホラ吹きクソジジイめ」とジョウジは笑い転げながら言った。

「ところでマスターよ、俺のアボガドはまだかい？」

「じき出来るよ、ジョウジ」とマスターは答えた。

（二〇〇三年七月）

オーヴァー・マイ・ヘッド

ロッキングチェアに揺られて昼寝をしている間に、僕の頭は胴体から離れてどこかへ飛んで行ってしまった。僕は目が覚めた後でそのことを知り、首の上のなんにもない空間を手でまさぐりながら、苦々しく「畜生」と思った。困ったなあ、夕方までに頭が戻って来てくれないと夕食が食べられないじゃないか。

と、思案に暮れていたところに呼び鈴が鳴り、「だんな、いるかい？」という聞きなれた<りんごじいさん>のだみ声がした。

<りんごじいさん>は僕の家の隣へ住んでいる、広大――とまでは言えないが、それなりに広いりんご農園の持ち主だ。<りんごじいさん>はりんごを栽培することに人生を賭けている。じいさんのりんごは想像を絶するほど美味しく、冬になると僕はじいさんのりんごを主食に生活していると言っても過言ではない。じいさんは白い息を吐きながら、一面りんごで埋めつくされたりんご農園を一日中歩き回って、収穫する。来る日も、来る日も、来る日も。その時のじいさんはこの上なく幸せそうで、三〇歳ばかり若返って見える。

「だんな？」<りんごじいさん>の声。「あんたの頭を拾ったから、届けに来たよ」

「本当かい！」僕は大喜びでドアを開けた。

<りんごじいさん>は、お気に入りのヒョウ皮のふちなし帽を頭にのせて、笑って立っていた。両手で、しっかりと僕の頭を抱えて。

「ちょっとりんごの木の様子を見にね、農園へ行ったらだね、これが木の枝にひっかかってたんだよ。おどろいたね！あれま、だんなのアタマが、こんなところへひっかかっちまってる！んで、わしゃ、すぐに取ってやって、こうして持って来たわけだ」

「どうも助かります」と僕。たぶん僕の頭は僕の胴体を離れた後で、りんご農園の中を飛び回っていたんだろう。それにしても木に引っかかって御用とは、何とも間抜けな話だ。

僕は<りんごじいさん>から頭を受け取って、首の上へ乗せた。よかった、一件落着だ。お礼にお茶をごちそうしますよ、と<りんごじいさん>を中に入れた。冷蔵庫を開けて、とっておきのチーズタルトを取り出す。幸い朝わかしたお湯が大量にポットの中へ残っていたので、それを使ってアプリコットティーをいれる。<りんごじいさん>はロッキングチェアーが珍しいのか、さっきからしきりに揺らしてみている。キーコ、キーコという音が台所まで響いてきている。

「今年のりんごも、楽しみにしていますよ」湯気のたつカップをふたつトレイへ乗せて、僕はリビングへ戻った。

「そいつぁどうも」と<りんごじいさん>。「ま、だんなが満足してくれる味にゃ、なると思うよ。」そして突然、「あれま、神様！わしゃぼうしを被ったままだったよ！」と叫んで、ふちなし帽を投げ捨てた。

冬になると、この街は雪に埋もれてしまう。「一面の銀世界」などという言い回しが生ぬるく思えるほどの大雪だ。この季節になると、家の外へは容易には出られなくなる（死ぬかもしれないので）。去年など、僕は一冬の間、ストーブの前へ腰かけてじいさんが作ったりんごをかじりながらボブ・ディラン詩集を読む以外のことは何もしなかった（できなかった）くらいだ。

ああ、そう言えば、その他にもうひとつだけやった事があった。雪かきである。これは大仕事だ。積もった雪を放置していると、最悪の場合家が大破してしまうので、僕はセーターを六枚重ね着した上にジャンパーを二枚羽織り（靴下は七枚重ね）、ぐるぐるとマフラーを顔にまで巻きまくり、毛糸の帽子をかぶり、手ぶくろを九枚重ねはき、スコップを手に決死の覚悟で表へ飛び出した。

ドアを開けると、顔の両側に激痛が走った……しまった、耳あてを忘れた！

慌てて家の中に引き返し、耳あてを装着し、再び出陣する。この偏執狂的な防寒対策にも関らず、悪魔の冷気は毛糸の繊維をいともたやすくくぐりぬけ、僕の肌を焼いていく。この命賭けの作業を終えた後、僕はストーブに抱きついて、まだ生きていられることを神様に感謝しつつ、ウィスキーをあおりまくった。ウィスキーが血管を走り、足の指の先っちょにたどり着いた時、僕は光に包まれる思いがした。

さて、そんな厳しい冬が終われば、待ち焦がれていた春が来る。溶けかけた雪をおしのけて、つくしが挨拶する。おしのけられた雪が川となり、川辺には花が咲く。春一番の風を感じると、僕の頭はいても立ってもいられなくなり、ぽんと首からはずれて飛んで行ってしまう……。

「春になると、色んな人がここを出て行っちまうよねぇ」

<りんごじいさん>、口のまわりをチーズだらけにして言った。

「だんなは、街へ行かねぇのかい？」

僕は、カップの底にうつった、自分の顔を見ていた。ぶざまに伸びた、ぶしょうヒゲ。

「だんなはまだ若いんだし、こんな片田舎でくすぶってても面白くないでしょう。ここにゃ何にもありやしねぇし、わしみたいな年寄りばっかですしな」

ストーブの炎の音が部屋を満たした。じいさんの影がゆらゆらとゆれた。

「しめっぽい話はやめましょうや」と僕は笑ってカップを手に取った。「さァ、このお茶をもう一杯やるといい」

やがて冬がきて、僕は部屋にとじこもり、ストーブの前でじいさんのりんごをかじりながらボブディラン詩集を読む。頭も家出を断念し（さすがに命は惜しいらしい）、おとなしく首の上へ鎮座している。一週間に一度、僕はセーターを六枚重ね着した上にジャンパーを二枚羽織り、（靴下は七枚重ね）ぐるぐるとマフラーを顔にまで巻きまくり、毛糸の帽子をかぶり、手ぶくろを九枚重ねはき、そして耳あてもちゃんとして、スコップを手に決死の覚悟で表へ飛び出す。命賭けの作業が終われば、ストーブに抱きついて、まだ生きていられることを神様に感謝しつつ、ウィスキーをあおりまくる。ウィスキーが血管を走り、足の指の先っちょにたどり着いた時、僕は光に包まれる思いがする。

そんな寒さの中で、<りんごじいさん>はりんごを収穫しているのだ。

さて、そんな厳しい冬が終われば、待ち焦がれていた春が来る。溶けかけた雪をおしのけて、つくしが挨拶する。おしのけられた雪が川となり、川辺には花が咲く。春一番の風を感じると、僕の頭はいても立ってもいられなくなり、ぽんと首からはずれて飛んで行ってしまう……。

頭は、僕が住んでいる田舎街の上を飛ぶ。そして、<りんごじいさん>の農園に舞い降り、じい

さんが収穫し忘れたまま枝に残っているりんごを探す。「一冬収穫されぬまま、ほうっておかれたりんごは意外なほど美味しい」と、誰かが言っていたっけ。

その気になれば、頭はもっと遠い所にも飛んでいけるだろう。行ったことのない街、華やかな街、人生を左右するような女性が住んでいるかもしれない街へも、飛んで行けるだろう。

しかし、頭はそうはせずに、結局は僕の首の上へと戻って来る。そして、もうタイトルすら忘れてしまったような古い歌のフレーズを口ずさんでみる。いつかこんな気分のいい日に、ラジオからこぼれていたあの曲のフレーズを。

頭のいるべき場所は、僕の首の上。そして、僕がいるべき場所は、この街。

（二〇〇三年九月二十三日）

メリケン波止場

喫茶店で、ハーブティーを飲みながらぼんやりと窓の外を通りすぎていく人たちを見ていると、だしぬけに君は「海風が吹いている」と言った。

地理的に言うと、この街は最寄りの海岸から２０キロも離れている。ちなみに、地球から最寄りの星までは、三十八万キロある。

「海風？」と僕は聞き返した。

「うん。・・・・・・なんか、そんな気がした」と君はカップの底を見ながら言った。

店内には、パッフェルベルのカノンがくり返しくり返しくり返し流れていた。あまり客のいないこの店はとても居心地がよかった。

「へんよね」

「へんじゃないさ」僕はぐっとイスの背もたれにもたれて、言った。「僕は海が好きだよ。」

君は笑った。「ねぇ、このあたりには海なんてなかったよね」

「それは大して重要なことじゃないと思うな」僕はもたれていた体をおこして、続けた。「問題は海の有無じゃなくて、海を感じたことさ」

僕は子供の頃に読んだ絵本について思い出した。その本には、ひねくれたオウムを肩にのっけたゆかいな船長が出てきた。あの船長のように七つの海を渡って行けたら、どんなにか気分のいいことだろうか。

「話、変わるけど」と君はまた窓から僕の方へ体のむきを変えて、続けた。

「今日、飛行船が飛んでたよ」

「へぇ」と僕は言った。「そいつぁいいね」

気の無い返事に聞こえたかもしれないが、この時の僕は単なる相づち・お愛想として「そいつぁいいね」と言ったわけではない。僕は純粋に「そいつぁいい」と思ったので「そいつぁいいね」と言ったのだ。

僕は飛行船が好きだ。あの鯨を思わせる、ずんぐりむっくりとした姿かたちも好きだし、のんびりとした飛び方も好きだ。しかし僕はたぶん一生飛行船に乗らないまま過ごすだろう、と思う。それは哀しいことだとも、思う。

昔は飛行船も、飛行機と同様、空の交通手段として大いに利用されていた。

しかし、大型飛行船のヒンデンブルク号が墜落し、大数の死者を出した事故以来、人を運ぶ乗り物としては利用されなくなってしまった。それ以後は広告用として細々と使われているのだけれども、テレビもインターネットもある今日だ、その需要も殆どなくなってしまっていることだろう。

「どんな飛行船？」

「だ円形で、白くて、船体の横に、“メリケン波止場株式会社”って書いてあったよ」

「メリケンハトバカブシキガイシャ？」僕は思わず聞き返した。「どんな会社だろうな」

「わからないわ。世界は、私たちの知らないもので溢れかえっているようね」君はカップを両手で持って、ハーブティーを口に含んだ。

「ねぇ、ところでさ、飛行船って名前がいいと思わない？」
君がカップを手にしたまま言った。
「なんかさ、青いあおい空をゆっくり横切っていく飛行船って、風のない日に、広い海の真ん中にプカプカ浮かんでいる船みたいに見えない？」
僕は、風のない日に、広い海の真ん中にプカプカ浮かんでる船に乗った自分を想像してみた。僕は肩にオウムを乗せて、ウィスキーをラッパ飲みしながら、「おもかじいっぱァい」と叫ぶ。水兵は、やれやれとでも言いたげに肩をすくめて、「風があればねェ・・・・・・」と答える。それがあんまりにもおかしな様子だったので、僕は思わず笑い出した。
君はそんな僕をキョトンと見ていたが、つられていっしょに笑い出した。
「おもかじいっぱい」と僕は言った。
「おもかじいっぱい」と君も言った。
ふと、窓から見える昼下がりの空を、何かが横切って行くのが見えた。「おや、また飛行船が飛んでいるな」と僕は言った。「どこどこ」と君は窓に鼻がくっつきそうになるほど近づいて、僕が指さした方角を見た。
「あれ、飛行船じゃないよ」と君。「あれは、海賊船よ」
よく見てみると、それはたしかに海賊船だった。船体には（どことなく子供じみていて愛敬のある）ドクロのマークが描かれ、ボロボロのマストが昼さがりの太陽にひるがえっていた。たぶんあの上には、ひねくれたオウムを肩にのせた、ゆかいな船長がマストによっかかって酔っ払っているのだろう。僕は君の方へ向き直って、「おもかじいっぱい」と言った。

フッと、海風が吹いた。

僕は、肩にオウムを乗せ、ウィスキーをラッパ飲みしながら、「おもかじいっぱァい」と叫ぶ。君は、やれやれとでも言いたげに肩をすくめて、「風があればねェ・・・・・・」と答える。船は、ゆっくりとゆっくりと、波の上をすべって行く。
そして、その午後は二人でマストによっかかって、雲を眺めて昼寝をする。オウムは時々思い出したように、サイモン&ガーファンクルのなつかしのヒット曲を歌ったりする。
やがて、夜になる頃、ようやっとメリケン波止場へ着く。僕はイカリを海へ投げこみ、君はばたばたとマストをたたむ。そして僕等は船をおりて、レストランや酒場の灯に照らされた港町の雑踏の中を歩いて行く。

（二〇〇三年九月二十二日）

銀座物語

——ガウディ氏にささぐる

1　アリクイ

ゾウが、街を横切っていく。

ゾウはサスペンダーを握りしめて、ゆっくりとした足取りで歩いて行く。彼は、ラッパの形をした街灯からこぼれ出している、くすんだ黄色の光で染め上げられている。

しかし、タバコのけむりを二つ三つ、目の前へ並べつつ考えてみるに、あれはゾウではないのではないか。鼻も、長いと言えば長いけれども、いつかどうぶつえんで見たそれは、もっともっと長かったはずだ。ゾウの鼻はあんまり長いものだから、檻からはみ出して道の途中まで伸びていて、通行人は皆それを踏まないように気をつけながら歩いたものだ。時おり、不注意な人やはしゃぎ回っているこどもが、その鼻を踏んづけてしまうこともあった。そんな時ゾウは、深く刻まれた皺の間に隠した眼玉で、彼らを鬱陶しそうに見つめていたっけ。その視線はわけもなく悲しいものだった。

さて（と僕はタバコの火を消した）。やはり、僕の目の前を歩いていくのは、ゾウではなさそうだ。あれはきっとアリクイだ。

アリクイは何かと僕に縁のある動物なのである。小さい頃住んでいた小さな借家の路地裏に、古い井戸があったのだけれども、その井戸の中にアリクイが住んでいると聞いた事があった。

アリクイの構成成分はセロファンなのよ、と、おとなりのおばさん（四六時中お米をといでいるので、「米とぎおばさん」と呼ばれていた）が言っていた。「だからアリクイの姿を見ちゃだめよ」と。「おばさんの知り合いのシンドウさんはね、アリクイだけは見せないようにして一人息子さんを育てていたの。でも、息子さんは十二才の誕生日が来る三日前の晩に、屋根の上でねむっているアリクイを見ちゃったの。息子さんはそれ以来、アリクイの言葉しか話せなくなってしまったんだだって！

ひねくれて嫌な子供だった僕は、とたんにアリクイの言葉をしゃべりたくなってしまい、おばさんの話が終わるなり井戸のところへ走って行った。僕は身を乗り出して、井戸の底を見た。しかし、光る二つの目だけは辛うじて見えたのだけれども、薄暗さのせいで全体像まではよく見えなかった。構成成分がセロファンだというのも、納得しかねた。

結局、アリクイの言葉は、今に至るまでしゃべれずじまいだ。

2　カモチョコレット

茶色のコオトのポケットいっぱいに、チョコレットを入れていた。なぜそんなことをしたのか、

よくわからない。寒くなってくると、ひとつぶ取り出して口の中へほうりこんだ。そうしたら心なしか、少しだけ身体の中があったかくなったように感じた。
「ひとつちょうだい」といっしょに歩いていた女の子が言った。
僕がひとつ渡すと、女の子は「ジャムのぶんも」と言う。ジャムというのは、女の子が飼っているカモの名前だ。
「でもジャムはチョコレットがきらいじゃなかったのかい」と僕はびっくりして言った。
「そうなんだけれどね、お母さんがね、カカオを食べさせろってうるさいのよ」と女の子は言った。「カカオを食べなきゃ、丈夫な鴨になれないって」
そんな馬鹿正直に言いつけを守ることはないのに。チョコレットをやらないでおいて、お母さんには「やったよ」とウソをついておけばいのに。でも、その女の子はあまりにも素直すぎて、ウソをつくことも知らなかったのだ。
女の子は手ぶくろの中から、まるまるふとったジャムを取り出した。僕はまたぞろびっくりして言った。「こんなに大きくなったのかい」
「そりゃ、チョコレットをやってるもの」と少し女の子はほこらし気に言った。
「サァ、早くちょうだいな」
仕方なく僕は、ジャムの口をこじ開けてチョコレットを何個も何個もほうりこんだ。ジャムは迷惑そうに僕を見ていたが、おとなしくしていた。ただ、途中でうっかり包み紙をやぶかずにほうりこんだ時には、怒って「グワア」と言った。

3　ピート・タウンゼント

学校の部室に忘れ物を取りに行った時のことだ。表は夜の寒風がごうごうと吹いていて、町工場から漂ってくる得体の知れぬ「がん、がん、がん」というこもり気味の音がステレオ効果とともに鳴り響いていた。
部室は電気がすべて消えていて、見事なまでに真っ暗であった。
手さぐりでドアを開けて、電灯のスイッチを押した。うすぼんやりと、豆球が灯った。その時である。部屋の片すみに、何か白いうごめく物が見えた。それは無地のTシャツに濃いグレーのジャケットを羽織り、エレキギターを抱え、青い目玉を闇の中で光らせていた。
僕は息を詰まらせそうになった。
ピートはゆっくり立ち上がって、「Ｋｉｌｌ　ｙｏｕ」とつぶやくなり、エレキギターをふり上げた。いけねぇ、殴り殺されちまう！僕は、ギターの下敷になったまま割れたスイカのようになっている自分の姿を想像して、背すじが凍りついた。
「ア、アイラブユアソング！」頭の中が真っ白になった僕は、カタコトの英語で、たったそれだけのことを叫んだ。そしてその後、続けざまに「アイ・リスペクトユー！アイム・ユア・ビッグ・ファン！リアリー！リアリー」とまくしたてた。
そんな僕を無表情で見つめいたピートは「ＯＫ」と言って、あと二、三言ほどボソボソッと独り言をもらした後、エレキギターを下ろした。僕は安堵のあまりへなへなと腰をぬかした。よかった。ザ・フーのファンでよかった。心からそう思った。
それから、ピート・タウンゼントは「ＤＯＮ‘Ｔ　ＬＯＯＫ　ＡＷＡＹ」と「ＳＯ　ＳＡＤ　ＡＢ

ＯＵＴ ＵＳ」と「ＩＮＳＴＡＮＴ ＰＡＲＴＹ ＭＩＸＴＵＲＥ」の三曲を歌ってくれた。素晴らしい演奏だったので文句は無い。しかし、ピートは有名曲でもないこれらの曲を一体どういう基準で選んだのだろう、と不思議に思った。

そのうち、この三曲が僕の大のお気に入りであることに気付いて、一旦納得しかけたのだが、「でも、リクエストもしてないのになぜピートは僕の好きな曲を知ってるんだろう。」という新たな疑問が生じた。未だに答えは見つかっていない。

辛うじて僕は「サンキュー」とだけ言って、握手もサインもしてもらわぬままに部室を後にした。

それにしても、ピートは偉大なロッカーだったんだなあ。僕はしみじみとそう思った。

4　猫時計

ぼーん、ぼーんと時計の鳴る音が、クリスマス風の電飾にいろどられた街をすり抜けて流れてきて、僕の耳の中にもぐりこんだ。

おや、このあたりには時計台がなかったはずであるのに、何故こんな音がするのだろう。僕は茶色のコオトをぱたぱたとはためかせながら、街を見回した。ひたすら、クリスマス風の電飾が連なっている。と、ふと、赤くぬり上げられた屋根の上に、やたらとでかい猫が寝そべっているのが見えた。どうやらその猫が、ぼーん、ぼーんという声を、ひしゃげたのどの奥からしぼり出しているようなのだった。

そう言えば七年前までは、この街にもちゃあンと時計台があったんだ、と僕は思い出した。それがある日、十二月の中ごろだったか、忽然と無くなっちまったんだ。おそらく、あのばかでかい猫が喰っちまってたんだな。でも件の時計は、あの猫の胃ブクロの底へ消化されずに残っていて、いまだにこうしてぼーんぼーんと音を出し続けているのだな、と思った。

パチパチと、猫のひげから静電気が飛んだ。それはあッという間に猫の背中中に広がって、発火した。猫は弱々しくもがき、炎を上げながら（くすぶりながら、という方が正しいやも知れぬ）屋根から転がり落ちた。サイレント映画のように音がしなかった。僕は猫が落ちた場所に向かって走った。

茶色だった猫は、いまでは真っ黒こげになってしまっていた。象のようにでかかったのに、僕のうでの中へおさまるくらい小さくなっていていた。哀れだった。僕はそっとそれを抱き上げた。毛が油っぽい。家へ持って帰って、庭へ埋めてやろう、と僕は歩き出した。と、その途端に僕は、自分が宿なしであることを思い出した。

そうだ。僕には帰る家がなかったんだよなァ。僕は哀しさのあまりぼろぼろと泣き、大きな涙のつぶが猫にふりかかった。猫を抱いているので両手がふさがっており、あふれ出る涙をぬぐうことはできなかった。こんなに広い街なのに、なぜ僕の寝床がないのか、あれだけ灯が灯っているのに、どれひとつとして僕の家のものではないのか、そう思うと、とてもやり切れなかった。

僕は放心状態のままであたりを見回した。どうやら、ここは銀座ではないようだった。では、ここは一体どこなんだろうーと僕は思ったけれども、そんなことがわかるはずも、いや、見当すらつくはずもなかった。それに、居場所を確認する以前に、この猫をどうするかを考えてしまわ

なければならないのだ。

猫の腹の中で、ぼーんぼーんと音がした。それにしてもやけに丈夫な時計だな、と思った。

（二〇〇三年十二月十六日）

金の鱒、銀の鱒

1

退屈な昼下がりだった。僕とジョウジは、シケたサービスエリアの食堂の片すみで、カラシの量が不思議なくらいに少ないホットドックをかじりながら、無駄にヒマをつぶしていた。このシケたサービスエリアには、目下のところ僕とジョウジと、さっき入って来てヤキソバを注文した貧相なトラック運転手のおっさんの計三人しか居なかった。とは言え、それもしごく当然なことに思える。このサービスエリアときたら、あまりにも酷すぎるのだ。駐車場は借りてきた猫の額くらい狭いし、休憩所はバラックみたいにぼろぼろであるし、しょぼいキーホルダーやら饅頭やら何かを売る土産物売場と、カラシのついてないホットドックを売る食堂があるだけ。

どうにかならんのかね、まったく。

「困ったねぇ、水玉スカーフ君よ」ジョウジが言った。「このままじゃ、ここで野垂れ死にだぜ？」

「そのアダ名、やめてくれよ」僕は、ともすればパンから落っこちようとするソーセージと闘いながら答えた。「何万回言えばわかるんだ？」

「あいにく俺にゃ学習能力が欠けてるんでね」ヒクヒクヒクと笑ってジョウジが言った。「なぁ、そこにある塩の瓶をとってくれよ。水玉スカーフ君」

僕は塩の瓶を片手に、「もう一度水玉スカーフって呼んだら、どうなるかわかってるよな」

「どうなるのさ」ジョウジ。

「二度と塩の瓶をとってやらない」

「オー、ママ！水玉スカーフの野郎が塩の瓶をとってくれないんだってよぅ！」ジョウジは裏声で言って、笑い転げた。

彼が笑い止むのを待って、言った。「よくそんなに明るくしていられるよな、このチキン野郎」

「だってやってらんねえよ。このままじゃ俺達ずっとここでだべり続けるハメになるよ。どう考えたってここへ止まる車なんて、そうそういやしないよ」ジョウジは唇のはしのよだれをぬぐいながら言った。

それから僕らは少し気まずくだまりこんで、ホットドックを食べていた。貧相なおっさんは、（悪漢とわたり合うハメになった時のバスター・キートンのような）ポーカーフェイスでヤキソバを事務的に、あくまで機械的にすすりこんでいた。

ジョウジの方をむくと、彼は不思議な方法でホットドックを喰っていた。まずソーセージをパンからぬきとって、先に食べてしまう。そして、残ったパンをじゃぶじゃぶとコカコーラへひたして、かじっている。

「なぁ、ジョウジ君よ」

「なんだい、スカーフ君？」

「俺も今まで色んな人間に会ってきたけど、ホットドックのパンとソーセージを別々に食べてる奴は生まれて初めてだな」

「知らないのか？ホットドックの大食い大会ではみんなこうやって食べてるらしいぜ」コカコー

ラ・パンをもぐもぐやりながらジョウジは事もなげに答えた。「こうして食う方が効率がいいらしいよ。」
なぜそれをサービスエリアで実践しなくてはならないのか、という点は疑問の残るところではあったが、そんなことは僕にとっ　てどうでもよいのだ。
そのとき、ヤキソバを（事務的に、あくまで機械的に）喰い終わったおっさんが席を立とうとした。「おっさん、ちょい待ち！」ジョウジが叫んだ。
おっさんは（悪漢を思ったよりカンタンにやっつけることが出来たときのバスター・キートンのような）キョトンとした目でジョウジを見た。「何だ？」
「おっさん、俺達ゃヒッチハイク旅行をしてるんだが」ジョウジはせわしなく言った。「もしイネカリ・シティの方向へ行くんなら乗っけてくれねぇか？」
「イネカリ・シティ？」おっさんは少し考えて、答えた。「落穂台の交差点あたりまでいいなら、乗せてってやってもいいが」
僕等は思わず顔を見合わせた。そして、おっさんに向き直って言った。「まじすか」と僕。「まじかよ」ジョウジが少しおどろいて言った。「いやァ助かった。まさかほんとに連れてってくれるとは思いませんでしたぜ、旦那」
「いやぁ本当に、おっさんは神様です」と僕は拍手をした。
「この御恩は一生忘れやせん」とジョウジはもみ手をした。
おっさんはようじを使いつつ少し苦笑いしながら、阿呆丸出しの僕等を見ていた。そして、つまったネギがとれたのか口をモゴモゴっとやってようじを床へほうり捨てた。
「それじゃ」とおっさんは手を出した。
俺たちがきょとんとしていると、おっさんは不敵な笑みを浮かべて言った。「まさかタダで乗るつもりじゃあなかろうね？」

2

「なんでイネカリ・シティへなんか行くんだ？」とおっさんが言った。「あそこは何にもねぇ街だぞ」
僕とジョウジはおっさんの横で、ひとりがけの助手席に仲良く腰かけている。せまいったらありゃしなく、息も満足にできない。その上ジョウジの左ひじが腹へめりこんでやがる。ひとり二〇〇〇円も払って、一体なぜこんな劣悪な環境に耐えなければならないのか、まったくもってわからない。（「東京でこれだけのスペースを買おうと思ったら、ン百万もかかるんだぞ」とおっさんは言った。だから何なんだ。トラックの助手席に家でも建てようってのかい？）
「たしかに何にもないとこですけど」僕はジョウジのひじ鉄を腹へ受け止めたまま、息もたえだえに答えた。「どこ」へ行こうと俺たちの勝手じゃないですか」
「それよりおっさん」とジョウジ。「なんとかならねぇの？俺達この助手席へ二人で腰かけているんだけど」「せまっくるしいったらありゃしませんよ」
「東京で電車へ乗ったらそれよりもっとせまっ苦しいんだぞ」とおっさんが言った。だから何なんだ。東京じゃ電車の中へトラックの助手席があるとでも言うのかい？
「文句があるなら、おりてくれ」僕の心の叫びをそれとなく察したのか、おっさんは高倉健のよ

うな口調でそう言い放った。
「とんでもありません。文句なぞございません」僕等はそう斉唱した。「こんな快適なドライブは生まれて初めてです」その後申し合わせたようにゲップをもらした。
そして僕等はだまりこんだ。この体勢で漫才をするのにはあまりにも無理がありすぎる。僕とジョウジは、ちょうど、「学校のマラソン大会で、最初は友達とぺちゃくちゃしゃべりつつタラタラ走っていたのだけれでも、折り返し地点を過ぎたあたりからだんだんと呼気が苦しくなってきて、そのままなんとなくまじめな顔をして口をつぐんでしまった」時のような、そんな感じでだまりこんだ。
青々とした山々が脈々と続き、春のクリーム色の日ざしが淡くそれをふちどっていた。まったくもって、退屈な三月二十七日の午後だった。
今度はおっさんの方が口を開いた。
「俺はもう仕事を止めようと思っててね」おっさんは鼻毛をいじくり回しながら言った。
「だからあんたらが、俺が乗せる最後のヒッチハイカーになるかもしれないな」
「はぁ」と僕は言った。「そうすか」とジョウジは言った。どうでもいいけどおっさんよ、興が乗ってきたからって両手で抜くのは止めてくれよ。せめて片手だけでもハンドルへそえておいてくれよ。
「俺はこの仕事がすきだがな、どうもな」おっさんはくしゃみを三発ばかりした。その度にアクセルを踏みしめるので、トラックは不規則に加速しまくるのだった。
「ところでおっさん」首を四十五度右へねじ曲げたジョウジが尋ねた。「このトラックは一体何を運んでるんだ？」ジョウジは相手が暗い話を始めるとそれとなく話題を変えるのだ。
「レンズ豆だ」とおっさん。「何十トンものレンズ豆だよ。このトラックの荷台の中にはギッシリ豆がつまってるのさ。俺はそいつを何万マイルもエッチラオッチラ運んでるってわけだ」
「鼻毛抜きながらな」とジョウジがそっとつぶやいた。
さて、ここでどうでもよい話をひとつ。レンズ豆という名の申来について。よくよく考えてみればレンズ豆というのは実に不可解な名称である。レンズと豆、これらはまるで手術台の上のミシンとコーモリ傘と同じくらい異質な二物である。レンズと豆、この異質な二物を結びつけている接点とは何なのか？意外や意外、これは史実が関係している。ある豆の新しい品種が開発された時期とほぼ同じ時期に、レンズが発明された。そのためその品種はレンズ豆と名付けられた。ただそれだけの話だ。もし万歩計が発明された頃に開発されていたら万歩計豆になっていたろう。
「何十トンものレンズ豆をね、何万マイルもエッチラオッチラ運んでるんだよ。何万マイルもね」おっさんは歌うようにくり返した。　僕はおっさんの話を基に一曲歌詞をこしらえた。細部のディテールは忘れたけどだいたいこんな内容だ。

れんずまめはこんで／千マイル
れんずまめはこんで／万マイル
あさからばんまで　れんずまめはこんで
れんずまめはこんで百万マイル

僕が曲をつけようと考えている間に、おっさんはマス釣りの話をしだした。すると今までおっ

さんの話には無関心を決めこんでいたジョウジがガゼン興味を示した。(彼は無数の釣好きなのである) おっさんは常時トラックに釣具一式を積んでいて、添流の近くを通りかかると即座に車を停めて釣りを開始するのだそうだ。
「でも、そんな事したら仕事に支障が出やしませんか?」と魚釣りを知らない僕が尋ねた。
「そりゃ出るさ。でもそれがどうしたってんだ?」と魚釣りに長けたおっさんが答えた。「そうだよそれがどうしたってんだ?」と魚釣りに長けたジョウジも賛同した。「釣りのためなら女房も泣かす、というだろう」
おっさんは五年前に、二メートルを超える巨大なマスに出会ったという。
「その日のことは生涯忘れやしないな」とおっさんは、夢見るような目で言った。鼻毛を抜く手も止めて。
「その話をくわしく教えてくださいよ」とジョウジが懇願した。
「まさかタダで聞こうってつもりじゃあないよな?」とおっさんが言った。その時おっさんのにごった目がギラリと黄金色に光ったのが何とも印象深かった。
ジョウジは当然のことのようにサイフから千円札を取り出した。僕は止めなかった。これでジョウジは、無一文だ。

3

「五年前のある日のことだった」とおっさんは、セッセと鼻毛を抜きながら語り始めた。「その日は実にいい天気でね。俺は釣りがしたくてしたくてしたくてたまらなかった。荷台にはクルミといっしょに釣り具を乗せていたし」
「その頃はレンズ豆じゃなくてクルミを運んでたんすか」とジョウジが真剣に尋ねた。
「まぁ、そうだ。それで、とにかく早いとこ川をみつけなきゃと思って、慌ただしく山あいの道を走っていた」
「職権濫用の上にスピード違反」僕はソッとつぶやいた。
「ようやっと左手に、太陽の光沢がキラキラと水面を覆いつくしている。大きな添流が見えてきた。いかにも釣れそうな川でね、あの水の中へまだ釣針へひっかかっていないマスがうようよひしめいているんだと思うと、もういてもたってもいられなくなってね。俺は道路のはじへトラックを停めて、釣り竿をかつぐと一目散に川へ向った。ガードレールを乗りこえ、丘の斜面をかけおりる」
ジェスチャー付きで語らないでよ。ちゃんとハンドルを持っといてくれよ、おっさん。
「ほとんど転がるようにして川辺へたどりつき、サァ!と竿の準備を始めるなり思わず固まった」そしておっさんはぶり回していた手を下ろし、厳かに言った。「エサを忘れた」
「ルアーは?」とジョウジ。「ああいうオモチャは使わない主義でね」おっさんは鼻毛抜きを再開した。「それじゃどうしたんすか」と僕。「まぁアセるな、坊や。本物の釣り師はそんなことで慌てたりしない」本物の釣り師はエサを忘れたりもしないと思うけれども。「俺は周りを見回してみた。見渡すかぎり草が生い茂っている。バッタの二、三匹を見つけるのはそう難しいことじゃないだろう」おっさんは立て続けに五発ばかりくしゃみをした。「それから一時間半で、二匹のバッタを捕獲した。そしてこいつをエサにマスを釣ることにした」

「一時間半もバッタを追ってたんだってよ」僕はジョウジにそっと耳打ちした。
「さぁこれで釣りが出来るぞ。獲物を求めて竿を手にした。とその時一瞬の隙をついて、あんなに苦労して捕獲したバッタどもが逃げちまった」
「おっさん、あんたもしかしてドジかい？」僕は呆れて言った。
「釣りの心を解さんバッタだった」おっさんは無視して続けた。（ダッシュボードの上へセッセと鼻毛を植えながら）「それで俺は、また一時間半かけてバッタを追わなけりゃならないのかと少し絶望的な気分になった。（そりゃなるだろうな。と僕は思った。）いかに優秀な釣り師でも、絶望する時はあるってもんよ。（ああそうですかい。そりゃケッコウなことで）しかしそこで俺は妙案を思いついた。俺はくつひもをナイフで細かく刻んで、釣り針の先へひっかけて、川の中へ放りこんだのさ！」
「ちょっと待って、おっさん」ジョウジが首をかしげて言った。「なんでまた、くつひもをエサにしたんだ？」
「糸ミミズとまちがえて、マスがくらいつくかと思ってさ」おっさんはまるで自分の生年月日を答えているかのような事も無げな口調でいった。
「それで、どうなった？」とジョウジ。
「投げこむなり、くらいついてきた」おっさんは胸をはった。
「そのマスはあんた以上のドジだ」と僕は言った。こんな汚い中年男のくつひもに食らいつくとは。
「問題はその後よ」おっさんは、鼻毛を植える手をとめた。
「おっ、くらいついたなと俺が思った〇コンマ一秒後。釣り針の先っちょにしがみついているそいつが、信じられないような馬鹿力で俺をひっぱったのさ。糸は切れそうになるまで張りつめて、竿は折れそうになるまでしなり、そして俺の両腕には百万トンもの重圧がズシンとのしかかった。俺はずるずるとひっぱられて前進した。恐怖と興奮が俺を満たした。でかい。異常にでかい。これは俺の釣り人生の中で文句なし一番の大当たりだ。いや、俺の歴史のみならず、釣りの歴史上にも残る大当たりかもしれん。こいつを釣り上げたら、俺はギネスに載れるかもしれん。でも釣り上げられなかったら、俺は川底へひきずりこまれちまう！川の流れがとまったように思え、風の音すらも耳へ入らなくなった。俺は川辺の岩へ足をかけて、あらん限りの力で竿をふり上げた。ふり上げたつもりだが、マスの馬鹿力ったらなくて、プラスマイナスマイナスで、俺はやっぱりまだ引きずられたままだった。竿は、あの化け物が水中をのたうち回るのにあわせてびんびんとしなりまくり、はたから見ていたら俺がマスに釣り上げられようとしている風に見えただろう。いや事実、そうだった。俺にはもう理性なんてなかった。何千年も前にマンモスを追いかけていたご先祖様の血が、俺の体中を駆けめぐった。止まっていた息が、肺から爆発するように吹き出して、そいつは「畜生」という音とともにあたり一面をびりびりとふるわせた。その瞬間、ザバンという音と、俺の背よりも高く上がった水しぶきとともに、俺の目の前へあの化物があらわれた。二メートル、いや三メートルはあっただろうか、ほんの一瞬だけ、そのマスの化物は空中へおどり上がった。そしてその直後、ザバンという盛大な水音と、俺の背たけよりも高い水しぶきを立てて水中へ落下した。
釣り糸が、耐えかねて切れちまったのさ」
沈黙の空気がゆっくりと車内を横切った。おっさんは鼻毛をブチブチブチとひっこぬいて、ダ

ッシュボードへなすりつけた。そして、フゥと細く長く息を吐いて、続けた。
「俺は呆然と、激しく波が立っている水面を見つめていた。なんてでかいマスだったんだろう。いや、夢だとしか思えない。遠い昔にサルが立ち上がってから今に至るまでの歴史の中で、あれだけでかいマスを見た奴は俺しかいないだろう。俺はひざっこぞうを抱えてしゃがみこんだ。しばらくの間動けないでいた。恐怖心がうすれていくにつれて、くやしさがこみ上げてきた。チクショウ、もしあのマスを釣り上げたら、俺は歴史に名を残す英雄になっていたのに。こんな話、誰も信じちゃくれないだろう、俺は一生、あのでかいマスの思い出を、自分の胸ン中へもてあましながら平凡に生きなきゃなんねぇんだ。俺はもう少しで、究極のマスをつり上げられてたんだ。究極の、最大の、そしてまぼろしのマスを。」
おっさんはそこで言葉を切り、少しの間目をとじていた。(時速百三〇キロでぶっとばしながら、である)そして、再び目を開いた。「奇跡が起こったのは、それからだ。
その時突然、川の水面がキラキラと輝き出した。不思議に思って見ていると、なんと水中から、白い羽衣を身にまとった、絶世の金髪女性が現れた。彼女は右手に金色のマスを、そして左手に、俺が釣りそこねた、あの怪物を持っていた。金髪女性は俺にむかってこう言った。
『私は川の女神です。あなたが釣り落としたのはこの金のマスですか、それともこっちのマスですか？』
俺は小便ちびりそうになりながらも、はじけるように答えた。『へぇ、そっちの、金じゃない方のマスです』ってね。すると女神はニッコリ笑って『あなたは正直者ですね』と言った。俺はうなづいた。すると――するとだ、信じられないことがおこった。その途端、彼女は醜い中年のおやじに変身したのさ――アッケにとられてポカンとしている俺に向って、女神改め中年おやじはこう言った。『私は魚釣り監視官だ。この川は禁魚区だぞ』そして俺は罰金一万円をとられちまった」おっさんの物語はそこで終わった。ニヤッと笑っておっさんはこっちをむいた。
「どうだ、少年たちよ、タメになる話だったろ」
「お前はこんな阿呆話に千円払ったんだぞ」と僕はジョウジに耳打ちした。ジョウジは無言だった。口をあんぐりと開けたままで。

4

やがてトラックは高速道路を下り、落穂台のふもと近くの交差点で止まった。
僕とジョウジはフラフラとトラックから降り立った。長時間にわたって軽業としか思えない体勢をとっていたため、体中の関節はどう動けばいいのか忘れちまっているようで、なかなか思いどおりに立っていられないのだった。
「ここでよかったかな？」おっさんもトラックから降り、僕とジョウジの前へ立った。
「ええ、ここでけっこうです」と僕。「よい旅を」おっさんが右手を差し出した。(さきほど鼻毛を収穫していたのは、幸いなことに左手だった。)
「ミスター・ペテンおやじ、楽しい旅でした」と僕はおっさんの右手をにぎった。
「ミスター・くそったれおやじ、面白い話をありがとう」とジョウジも握手をした。
おっさんは気まり悪そうに笑って言った「金、返そうか？」
「いらねぇっすよ」ジョウジは悟り切った顔をしていた。

「それじゃ、プレゼントって言っちゃあなんだが、ちょっといいものをやるよ」そう言い残して、おっさんはトラックの荷台の扉を開いた。
二分ほどして、おっさんは何か大きな白い箱をかかえて、降りてきた。おっさんはフゥ、フゥと荒く息をしながらその箱を僕らのところまで持って来て、でんと地面に置いた。
おっさんは箱のフタをとった。中をのぞきこんだ僕とジョウジは思わず息をのんだ。見たこともないようなでかいマスが横たわっていた。
「今朝つり上げたんだ」おっさんはマスの目を見つめながら言った。「さっきのホラ話に出てきたマスよりは小ぶりだがね、俺が今までに釣ったマスの中じゃこれが一番でかいだろうよ」
「しかしおっさん――――」と僕は言った。が、何を言うべきかわからなかった。「そんな、おっさん――――」と言ったきりジョウジもだまってしまった。「本当にもらっていいの？」
「たぶんこいつはお前らのために、俺の釣り針へ食らいついて来たんだろうよ」おっさんは笑ってそう言った。「それじゃ、俺は、もう行かなくっちゃな」
おっさんはトラックへ飛びのり、次の瞬間、マンモスの屁のごとく巨大なエンジン音をぶっぱなして、走り去った。僕とジョウジはおっさんのマスを前に、無言でただただ立ちつくしていた。おっさんのトラックが見えなくなるまで、そうしていた。じっと、そうしていた。
「おや」マスに目を落として、ジョウジが言った。「見てみろよ、そのマス」
僕はしゃがみこんで、箱の中をのぞきこんだ。くしゃくしゃに丸まった千円札が四枚、マスの下へおしこめられていた。
僕は思わずニヤリと笑った。「なかなかイキなことするじゃんか、あのダディは」
「まったくだ」とジョウジ。そして僕等は大笑いして、マスが寝ている箱をかつぎ上げた。「全額は返金していないところがさすがだな」
「ところでさ」とジョウジ。「話変わるけど、お前、その変テコなスカーフやめたらどうだ？」
「うるせぇ、ほっといてくれ」と僕は言い返した。ジョウジは朝からずっと、僕が巻いている水玉模様のスカーフにケチをつけ続けているのだ。
「ワァ、水玉スカーフ君が怒ったァ」
「いい加減にしねぇと、この箱お前ひとりに持たすぞ」
「持ったら、塩の瓶はとってくれるのかい？」
「知るか、阿呆」
僕等はマスの箱をかついで、田舎道を歩き続けた。
たぶんそれは、純金のマスよりもずっと重かったことだろう。

（二〇〇三年十一月八日）

牛の背中

もう一人の僕は牛なので、お土産に牛乳を持って来た。

「うちの家内が出した乳だよ」もう一人の僕は、シッポでバシバシと自分の脇腹をはたきながら言った。「もうキチンと牧場で煮沸殺菌してもらって来たから、そのまんま飲めるよ」

実際の話、もう一人の僕の持って来る牛乳はまことにうまい。半年振りということもあり、感慨もひとしおである。さっそく、入れ立てのコーヒーにその牛乳をなみなみとそそいで、さしむかいでこれを頂くことにした。

「牧場の方はどうだい」僕はカップからたちのぼる湯気にむせ返りながら尋ねた。

「チョットその前に」もう一人の僕が苦し気に、ムフゥ、ムフゥと肩で息をしながら言った。

「これじゃ飲めないよ」

僕は御免、御免と言いながら、コーヒーカップの中身を洗面器へあけた。もう一人の僕はブルブルと鼻をふるわせながら、ぴちゃぴちゃとそいつをなめ始めた。

「牧場の方は」僕はまたぞろ湯気にむせ返りながら尋ねた。

「まずまずだね」ともう一人の僕。「モリモトさん（牧場主）が、新しいタンクを買ってね。ナカナカ効率がよくなったよ」

「じゃァ、万々歳だな」

「でも家内の胴回りがねぇ・・・・・・どうも」ぴちゃぴちゃ。「シュッとしたい牛だったんだがね、どうも、肉がたるんできてねぇ。ヤッパリ年なのかね」言ってから、『しまった』という風に目を黒く光らせた。

「御免」

「いや、いいよいいよ、気にすることないさ」僕は笑って言った。「僕の分まで、恋女房の話をしてくれよ」

僕はふり返って、壁に貼ってあるサヨコの写真を見た。サヨコが喫茶店〈ロージー〉でアプリコットティーを飲んでいる所を撮ったもので、彼女は吹き出しそうになりながらカップのかげに隠れている。オリジナルはカラーなのだけれども、モノクロに加工して飾っている。

「もう三年になるからね」と僕。「でもいまだに信じられなくてね」

「そりゃそうだろう」もう1人の僕が気の毒そうに僕を見た。「あッという間だったんだろ」

「うん。突然倒れて、もう翌日は駄目だった」僕はコーヒーカップの底を見つめていた。「まァ、その話はよそうよ。ところでさ、マレーネが子供を産んだよ」

「マレーネが？何匹？」

「四匹。あの、ホラ、魚屋さんの隣の村上さんとこにさ、カッコいいドーベルマンがいただろ」

「いや、それは初めて聞いたけど、そのドーベルマンが父親なのかい」

「という話だけどね」僕はカップの底にへばりついていたコーヒーの残りを飲み下した。ジャリジャリと、溶け切っていないザラメが舌の上へ残った。「見に行ってみるか？」

「あァ、行こう」もう1人の僕は言って、モォオと大あくびをして後脚を突っ張った。

「快適、快適」
僕は、ゆっさゆっさと揺れる牛の背中に乗って、表通りを行進した。「牛は乗物としても超一流だね。見慣れた街の風景が、目の高さを変えるだけで、まったく別の表情になってしまう。」
「帰りは交代だぞ」ともう一人の僕が言った。「そんなの、無理に決まっているだろう」と僕は笑い転げた。
マレーネはいつものように、床屋の前でたぬき寝入りをしていた。「おい、マレーネ、マレーネ」と呼びかけても、うさん臭気に耳をピクピクさせるだけである。マレーネの腹に、ふわふわした生き物が四匹、くんくん言いながら顔を突っこんでいた。
「おぅ、おぅ、おぅ」と、もう一人の僕が言った。
しばらく僕らは、マレーネとそのふわふわとした子どもたちを眺めていた。やがて、子どもたちは満足気に眠りについて、マレーヌもたぬき寝入りから昼寝に切り換えたので、犬たちの周りを午後の静けさが取り巻いた。
「さてと」と僕。「行くか」
「うん」ともう1人の僕。「そうだ、ついでに魚屋のドーベルマンも見て行きたいんだけどなァ、ここから近いか？」
「あァ、けっこう近いよ。行ってみよう」そうしてまた、ゆっさ、ゆっさと僕の尻の下が揺れ初めた。
昼が終りかけていて、カンカンカンカンという踏切りの声がどこからともなく流れて来た。何となくけだるい大空が、ゆっくりと赤く染まり始めていた。そしてその下に広がる街の中を、プーッというけたたましいラッパの音が走って行った。
「ラッパ？」ともう一人の僕が言った。
「豆腐屋さ」と僕。「昔ながらのスタイルでね。自転車にまたがり、ラッパ吹きながら売りにくるのさ」
「なるほど。そこで消費者たちは、金臭いボウルを持って、『オトウフヤサーン』って走ってくるのか」
「そうそう、そいで、豆腐をその金臭いボウルの中へ入れてもらう」
「おっさんの手と豆腐からしたたり落ちた水が、地面に滲みこんでシミになってね」
「そうそう、そんな情景が繰り広げられているのさ」僕は笑った。「そこを右に曲がれよ」
ラッパの音が、ドンドン遠ざかって行った。
「ここだ〈ロージー〉」僕は、もう一人の僕の背中をポンポンとたたいて言った。
「アア・・・そうかい」ともう一人の僕は答えた。
「ホラ、あの黒くて小さなドアの横っちょに、小さなアロエの鉢を置いてある」と僕は言った・・・・・・。

昔は、サヨコといっしょによくここへ来たものだ。店長はいい人だった。白髪頭で、元ジャズマンだった。僕らはしょっちゅうオーネット・コールマンについて話をしたものだ。
僕と店長が、言葉で表しようがない「音楽」についてもどかしく語り合っては、ハミングして、手をたたいている様子を、サヨコはいつも笑って見ていたのだ・・・・・・。

ゆっさゆっさと、もう一人の僕の背中がゆれていた。
そうだ、今度久しぶりに<ロージーに>行ってみようか、と僕は思った。
それで、昔いつも座っていた席に座って、店長と夜通し語り合ってみようか。
そこで、「うちの家内は綺麗な女でした」と言ってみたいのだ。
そして、アプリコットを飲んでみようと思う。

もう夕ぐれ時だった。
ふと空を見ると、夕焼け空を一羽のつばめが横切って行った。
「オヤ、つばめだ」もう一人の僕が驚いて言った。「こんな真冬にどうしたんだろう」
「あれは、もう一人のサヨコだと思うな」僕はそう言って、タバコに火をつけた。

（二〇〇三年十二月二十八日）

僕の夏にはアズキアライと極楽鳥がいる

1

アズキアライという妖怪がいる。人気のない川で、「アズキ洗おぅか、人とって喰おうか、シャキ、シャキ」と歌いながらアズキを洗うという、まことに不思議な化け物で、日本全国にその言い伝えが残されている。アズキを洗っているかと思うと人をとって喰っているわけで、まったくもって地味なのか派手なのかわからない妖怪だ。しかし僕はアズキアライについて考えるたびに、誰もいない田舎の山の奥深くを静かに流れる川のほとりにぽつねんと座りこんでいる異形の老人の姿と、鳥の声と水の音といりまじって響いてゆく「シャキッ、シャキッ」というアズキを洗う音を想起し、どことなく哀しいようなさびしいような気分が胸中をただようのである。

僕がアズキアライに会ったのはたった一度だけだ。それはたしか中学校へ入った年の夏のことだった。カナカナカナカナ、とカナカナゼミの声があちらこちらで聞こえていた。アスファルトの上を水が逃げまくり、かげろうが街をゆがめていた。

僕はプールから帰っている途中で、川ぞいの道をちんたらちんたら自転車をこいでいた。かごに放り込んだ水着入れから、カルキのにおいがただよっていた。夏だった。

小学校前の交差点をわたり、小さなスーパーの前を通過したその時だった。僕の耳へ、シャキシャキシャキ、という不思議な音がひびいてきた。最初は、風が木の葉をゆらしている音だろうと思っていたが、どうもそうではないようだった。シャキシャキという音は時が経つにつれて大きくなっていき、仕舞いには只ならぬボリュームになった。ひょっとして耳鳴りかな、とも思った。僕は幼年時代に中耳炎にひどく悩まされたことがあり、またぞろそれがぶりかえしたのかと思ったのだ。しかし、耳鳴りでもなさそうだった。よく聴くと、それは豆と豆のこすれ合う音のように思えた。これは幻聴にちがいない、と僕は最終的に判断をくだした。夏の暑さでおかしくなっちまったんだ、脳髄が沸騰しちまったんだ・・・・・・。

家へ帰りついた後、晩飯を食べている間も、風呂へ入っている間も、シャキシャキという音がとぎれずに聞こえてきた。僕はもう何も手につかなくなり、いつもより大分早く寝床へ入った。しかし、シャキシャキという音は耐えがたいほど大きくなっていて、その上頭もガンガンと痛み出して、眠れやしなかった。僕はやけになって台所へ這って行って、父親が冷蔵庫の奥にかくしていたウィスキーの瓶を取り出して生のままあおった。酔いつぶれて寝てしまおうという作戦である。

結局作戦は辛くも成功し、僕はウィスキーの瓶を手にしたままで台所のど真ん中へのびてしまった。目が覚めたのは翌日の朝で、シャキシャキ音は消えていたものの、宿酔いで頭が陰々滅々と痛かった。

おそらく、あのシャキシャキシャキという音はアズキアライの仕業だったのではないかな、と思う。なんの確証もないのだけれども、僕には何故だかそういう風に思えるのだ。

お祭りの日は、公民館前広場にやぐらが立った。やぐらと言ってもそれほど大仰なものではなく、人間が三人も乗ったら壊れてしまいそうな代物だった。やぐらの上には、大きな極楽鳥が座っていた。逃げられないように、足にロープがきつく巻きつけられていた。この極楽鳥は、僕の町の姉妹都市の市長から贈呈されたものだった。極楽鳥はしきりにまばたきを繰り返しては、異国の町並を見回していた。かなり衰弱しているように見えた。仮にロープをほどいたとしても、飛び立つことはなかっただろう。飛び立ったとしても、遠くまでは行けなかっただろう。遠くまで行ったら、そこで死んだだろう。

お祭りにもかかわらず、あまりにも人が少なすぎた。折しも同じ日に隣り町でも祭りをやっていて、みんなそっちの方へ行ってしまったのだ。くり返しくり返し盆おどりの曲のテープが流されていたのだけれども、誰ひとりとして踊ってる人はいなかった。ある人はTシャツにジーパンというふつうの服装で噴水の淵に腰かけていた。路上で四〜五人のむさ苦しい若者が、缶チューハイを飲みながらスナック菓子をつまんでいた。浴衣姿の小さな女の子の手をひいてやって来た若い母親が、とまどったように辺りを見回していた。ベンチへ座って坂口安吾を読んでいる僕がいた。疲れた顔のテキ屋らしき男が、やぐらの周りをうろうろ歩き回っていた。極楽鳥はテキ屋の行方を目で追っていた。屋台はフランクフルト、わたがし、イカヤキの三軒が出ていた。フランクフルト屋の兄ちゃんは退屈しきっており、屋台にもたれてタバコを絶え間なくふかし続けていた。

僕は安吾を閉じて、サイフをポケットから取り出し、手の中でもてあそびながら屋台にむかった。屋台で売っている食べ物はいくらでも食べられそうな気がした。そう、お祭りの夜はいくらでも食べられそうな気がした。

イカヤキ屋は、イカの胴体を焼いた一般的なイカ焼きの他にも、足を焼いたやつをその半値で売っていた。パン屋は食パンの耳をあげて砂糖をまぶして売るし、ヤキトリ屋は皮やキモも串へ刺して焼いて売る。何ひとつ無駄にならない。イカの足焼きは半分の値段で、胴体のイカヤキと甲乙つけがたい味だった。つっ立ったなりで、行儀悪く食べた。これは実においしいよと言うと、屋台のおやじはぴょこりと頭を下げた。

テキ屋が、プラスティックのコップを片手に、フラフラとこっちへ歩いて来た。テキ屋はイカの足を一つ買い求め、僕に話しかけた。「だめだァね、今年の祭りァ」

僕が曖昧に笑っていると、テキ屋は続けた。「うちの町の祭りはサッパリ人が来やしねぇ。今日ぁたしか、隣町でも祭りがあったよな」

「ええ、そうらしいですね」

「みんなそっちへ行っちまってるんだろうよ」テキ屋は、イカの足をかみ切ろうと悪戦苦闘していた。「気分悪いな。なんでも、隣町の祭りには毎年××××がゲストで来るんだってよ。」

××××というのは、たいていの人が知ってる大物歌手だ。「へぇ、××××さんがねぇ」と僕もイカの足に手こずりながら言った。

「俺は××××がきらいだな」テキ屋はようやっと足を1本かみ切った。「お高くとまりやがって、くだらねぇ歌ばかり歌いやがって。たいして声もよかねぇじゃないか。なァ、知ってるか。この前週刊誌で読んだんだが、××××はまた不倫してるんだってよ。旦那が不憫で仕方がないね。

だめだね。あれは。本当に。」
テキ屋はコップの中身を飲み干した。臭いからすると、どうやらショーチューのようだ。テキ屋はしゃべり続けた。「おまけに何億てな資産を持ってるんだろ、あのアバズレは。そんなのが泣きそうな顔で貧乏の歌を歌うってのが、どうも好かねぇな。とにかく××××はダメだ。ダメだダメだ」
テキ屋はそれっきりだまりこんでしまったので、僕はイカをかじりながらそこを離れた。もう盆おどりのテープは流れておらず、祭りに似つかわしくない陰気な雰囲気が一層高まっていた。さっきの親子連れは、噴水の近くで向かい合い線香花火をしていた。
どーん、どーんと、遠くで打ち上げ花火が夜空に咲く音が聞こえていた。その花火が放った光は、きっと何百人もの上気した顔を照らし出したはずだし、同時に僕の町に影を作ったはずだと思う。影の中で一寸先も見えず、かすかに線香花火がともるだけ。
僕はやぐらの下に立った。そして、極楽鳥を見上げた。どうもその極楽鳥の目が、去年死んだ同級生の女の子に似ているように思えたのである。
その子は何で死んだのか、よくわからなかった。彼女はある日突然熱を出して寝こみ、あくる日に逝ってしまった。それは高校三年の夏のことであった。どう考えてもおかしな出来事だった。特に病気がちな子でもなかったが、言いようのない儚さを感じさせる人だった。
僕はその子と話したことはない。そして、当たり前のことだけれど、これから先も話すことはない。もし彼女が生きていたら友達になっていただろうか。それともやはり何も話さないままでいただろうか。あるいは恋に落ちていたかもしれない。ただひとつ言えることは、この世の座標軸は、どう伸びていくのかわからないということだけだ。
「ねぇ・・・さん？」極楽鳥にむかって、僕はその子の名を呼んだ。
「・・・さんなんだろ？」
極楽鳥は何も答えなかった。夏の夜にしては涼しい風が吹いてきて、その羽根を優しくゆらした。
いつの間にか親子連れも、噴水の淵に腰かけていた人もいなくなっていた。缶チューハイ片手の若者達が、星に照らされている。まるでタイコみたいな花火の音が、どーんどーんととぎれとぎれに響いてきた。アスファルトの地面には、二つに折れた吸ガラがいくつかと、燃えつきた線香花火が落ちていた。僕は歩いて行って、そっとそれを拾い上げた。こんなにもかなしいきせつ、と僕はつぶやいてみた。身を切るような冬の寒さも、夏が秋へと変わるその瞬間には及ぶべくもない、そういう風に思った。
吸ガラと花火のカスをゴミバコへほうりこんだ。家へ帰って風呂へ入って寝ちまおう。僕はくるりと、広場に背をむけた。お祭りから帰るのは、いつだって嫌いだった。わけもなく興奮して、血の上がった頭が、帰り道に吹く冷たい夜風に冷やされていくうち、やりきれない気分になったものだ。そして、いつも気づいてしまうのだ、夏の夜がどれだけやりきれないものであるかということに。
また、どーん、どーんと花火が上がった。なにもかもが月明かりの中に消えてゆく。どうせ明日の朝がくれば、このわびしい気持ちもどこかへキレイサッパリ消えてしまっているに決まっているんだ。そして、そのことは誰にも知られやしないだろうし、誰にもわかってもらえないのだろう。

ふと、ふり返り、空を見上げた。古い本に巻かれたパラフィン紙のような空だった。何にもしゃべらない空だった。そんな空を、ゆっくりと極楽鳥が飛んでいくのが見えた。
あの極楽鳥はどこへ飛んで行くのだろう。
・・・・・・たぶん星になりに行くんだ、そう思った。

その時、耳元でシャキシャキと音がした。

3

「今日でもう、東京に戻るんだろ？」カラッポになったコップ（それは三十分前まではほろ苦い麦茶で満たされていた。）を手に、ジョウジが言った。
「ああ。」と僕。「今日の四時の電車でね」
僕はぐるりと部屋を見回した。ジョウジは絵を描くのが趣味で、壁いっぱいに自分のイラストを貼っている。その中に、巨大なみかんを紙いっぱいに描いた絵がある。これは彼の幼稚園の時の作だそうだ。僕は始めてこの絵を見た時、「これはなんだ」とびっくりして尋ねた。「なんだって、みかんだよ」とジョウジ。
「いや、それは見ればわかるけどさ、なんでみかんの絵を貼ってるんだよ」
「深い意図は特にないんだけどもね、何となくうまく描けて気に入ったから、貼ってみたのさ」
僕が今日、彼の家へ行き、彼の部屋へ行った時、まず探したのがそのみかんの絵だった。それは、いくぶん紙が茶色っぽくなっていたものの、十年前とまったく同じように壁に貼られていた。アァ、これだ、このみかんの絵だった。と僕は安心感にも似たなつかしさを胸の中へ宿らせていた。その絵は、すでに終ってしまった季節に取り残されている自分と、現在の自分をつなぎ止めている糸のように思えた。
この部屋で、僕とジョウジと共通の友人である吹奏楽部員とで文化祭のポスターを描いたこともあったっけ。僕ら三人はバンドをやっており、その宣伝のためポスターを作っていたのだ。ジョウジはどんどん意見を出しては吹奏楽部員に却下され、僕はジョウジの本棚の並んでいるマンガを読んでばかりいて、ちっとも手伝っていなかったっけな。今となっては遠い話で、なんだかんだ言いながらも楽しくやってたっけな、と思いおこした。そしてこのみかんは、そうした長く退屈な歴史を見下し続けていたんだ。
僕とジョウジは、自堕落にタタミへ寝っ転がって、高校野球の中継を見ていた。テレビの中に映し出されている球児たちの砂ぼこりを立てて走りまくる姿も、僕が子供の頃から何も変わっていないように思えた。なんだか、もしこの世界が終っても、地球が爆発して消滅しちまっても、やっぱりその翌年の夏はこうしてタタミの上に寝っ転がって、麦茶を飲みながら高校野球の中継をみているような気がする。
「何考えごとしてるんだよ」
ジョウジが僕を見て言った。
「別に」と僕。「昔のことだよ」
「あんまり昔のことなんて考えるなよ」と彼は言い、クッキーをつまんだ。「明日を見なきゃ」
でも、なんだか僕にとって、今は昨日も今日もたいして変わらないものに思えるのだけれども

ね。
「じゃ、俺、そろそろ行くよ」僕は立ち上がった。試合は五回のウラで、今しょうゆ顔のバッターがフライ中のフライともいうべきキング・オブ・フライを打ち上げたところだ。（しかし外野手は取りそこねた）。
「中途半端な時間に帰っちゃうんだな」ジョウジは立ち上がった。
「昔もそうだったろ？」
「そうだったっけな」
ジョウジは門の前で見送ってくれた。一面に広がる田んぼ地帯の真ん中の住宅地、そのうちの一軒の家の前へ直立不動でつっ立っている男が、だんだんと遠くなり、それとともに夏はすぎていくように思えた。
何ひとつ変わらずに、すべてが変わってゆく。

久しぶりの里帰りだった。何年ぶりになるだろう。今、発車を待つ電車の中で、窓ガラスに額をおし当てながら、これを書いている。あともう2分で発車する。そうすれば、またこの町は遠くなる。
久しぶりのふるさとは、やっぱり僕の思い描いていた通りの町だった。変わらないものはないだろうし、この町も昔と比べてあちこちが変わったのだろうけれども、今町を吹いているこの風は、あの祭りの後に吹いてた風と同じだったし、昔の僕にそっくりなプール帰りの少年たちが、道をちんたらと走ってゆくのも見た。たぶん、十年、二十年あともこのままなのだろう。そしておそらく、僕が死んだあとも、何ごともなかったように夏が来て、風が吹いているだろう。
ベルが鳴って、がたんと客車がひとゆれした。僕は首をもたげて、ゆっくりと後ろへ後ろへ流れ出した景色を見やった。あの極楽鳥は星になれたかな、と思った。なれていたらいいのにな、と思った。きっとなれているだろうさ、と思った。そして、静かな川のほとりへぽつねんと座りこんで、アズキを洗い続けている老人のことを思った。アズキアライは今でもどこかでアズキを洗っているだろうか。そして、アズキを洗うシャキシャキという音は、あの時と同じように、少年たちの耳にひびいているのだろうか。
列車は次の駅を通過したので、僕は窓から目を離し、目をとじた。まだアズキアライがアズキを洗い続けていたら、素敵だろうなと思った。そして、いつになるかわからないけれども、もしあのシャキシャキという音をもう一度聞けたら、ちんたら自転車をこいでプールから帰っていたあの頃の僕とつながれるのだろうな、と思った。そうしたら、夏はもうさびしい季節ではなくなるだろう。なんの確証もないのだけれども、僕には何故だかそういう風に思えるのだ。

（二〇〇三年十一月十一日）

びんぼう神

ホーレン草のおひたしで一杯呑んでいたら、びんぼう神が入って来た。

ノレンをめくる音がしたかと思うと、貧相なヒゲを中途半端に伸ばしてボロをまとった野郎がヒョロヒョロと入ってきたので「あァ、びんぼう神だな」とすぐにわかった。カウンターの向うで忙しく働いているリョウやんの方へ目をやっると、リョウやんはちょっと手を止めて腰をおこし、ウサン臭げにびんぼう神を一目見た。そして、ヤレヤレと言いたげに首をふりふり、またぞろ山芋をすりおろし出した。

びんぼう神はがらがらの店内を見回して、そして僕の横へ座った。ヒュルルルルと、僕の背中で寒風が吹いた。

「コーシー、一ツ」とびんぼう神は欠けた歯を見せ、節だらけでひょろ長いひとさし指を立てて注文した。そして、僕の方を向いて、へへと笑った。

程なくして、リョウやんがコーヒーをいれて持ってきた。ずずずと少し遠慮がちな音を立てて、びんぼう神はそいつを飲んでいた。

「××のキッサ店の二階は吹き抜けでね」びんぼう神が言った。「年がら年中、びゅうびゅう風が吹いているのさ。いつだってあの店は、風ばっかり吹いているのさ！コーヒーカップの中に波が立つくらい、強い風がね！」

へへへと笑い、またぞろびんぼう神はずずずと音を立てた。

「おれはずっとあの二階へ居たもんだが、寒くて寒くて仕方がなかった！柄にも無く、風邪をひいちまってね。ハハ、おかしいだろ。びんぼう神が風邪ヒキだなんて。洟汁を始終垂らしていた。そいでおれは、洟汁をすすり上げすすり上げ、そこをおん出て来た。しかし、どうだ！おれの行くところ行くところがことごとく寒くなるんだ！こんな調子じゃ、いつまで経ってもこの風邪は治らねぇな」

演説を終えたびんぼう神は、へへと笑って僕の方を向いた。

「おや、こちらサン、うまそうな物喰ってるな」

僕は聞こえないフリをした。

「なァ、ひと口でいいからサ、おくれよ、なァ」

その時僕は突然、この声が聞き覚えのある声であることに思い当たった。それは五年前に学校を出て以来会っていない親友の声にウリ二つだった。

僕はハシを置いて、その汚い顔に向き直って、問うた。

「あんた、五年前は何をしていた？」

びんぼう神は答えた。

「そんな昔のことなぞ、覚えちゃいないよ」

そして、照れ笑いをした。

その時僕はふと気が付いた。僕も彼と同じように、貧相なヒゲを中途半端に伸ばしてボロをまとっていることを。

僕も、照れ笑いした。

（二〇〇四年七月二十三日）

おばけ煙突

1

ひとまず、仕事が一段落した。僕は弁当屋を呼んで、ハンバーグ弁当を一つ注文した。そして窓辺に歩み寄り、ブラインドを上げて空を眺めた。

遠くに、工場のエントツが四本見えた。エントツの先端からもくもくと吐き出されているケムリと、空に垂れこめた雲がつながっている。何故だかしらないけれど、僕はそうした風景が子供の頃から大嫌いである。エントツが得体の知れない化け物に思えてならないのだ。それならブラインドを下げたままで居ればいいじゃないか、何もわざわざ外を見る必要もないだろうに。・・・・・・その通りである。しかし僕は『さァひと休みしよう』と思い立つと、無意識のうちにブラインドを上げて外を見てしまうのである。僕自身ではわからないところで、こわいもの見たさの心理が僕をつき動かしているのかも知れない。

「メシ、喰わねぇの？」

僕はふり返って、まだキーボードをカチカチと叩いているジョウジに声をかけた。

「あぁ、このメール送ったら、喰うわ」

ほどなくしてジョウジは「あァ済んだ済んだ」と欠伸まじりに雄叫んで、伸びを一ツした。そして弁当屋を呼び、カキフライ弁当を注文した。これで彼は二週連続でカキフライ弁当をお昼に喰っていることになる。さすがに僕も呆れて「たまには他のもの頼んでみろよ」と言った。

「そう言うお前だって、月水金はハンバーグ、火木はトリメシを注文する日と決めてるじゃないかよ」ジョウジは口をとがらせた。「たまにはカキフライでも喰ってみろよ」

「カキは好きだが、あたるからな」

「あたる？生牡蠣じゃあるまいし。カキフライはチャント油であげてあるんだぜ？充分すぎるほど火ィ通ってらァ」

そこへ弁当屋がハンバーグ弁当とカキフライ弁当を持って来た。「お、来た来た」とジョウジは茶を入れに行き、僕は領収書を受け取った。

「いただきます」ジョウジはワリバシの先をチャッチャッとこすり合わせて、弁当を手前に引き寄せた。僕も負けじと、弁当のフタをはねのけた。

しばしの間、両者とも無言である。しゃべる穴と物を喰う穴が同じであるからだ。二人して鼻をふがふがと鳴らして、たいへん行儀悪く麦飯をかきこむ。

「ちょっとハンバーグくれ」

アゴにメシツブを付けたまんまで、（しかも口の中は麦飯でイッパイである）ジョウジが言う。

「じゃァかわりに少しカキフライよこせ」

アゴにメシツブ付けたまんまで、（しかも口の中は麦飯でイッパイである）僕が答える。

「あたるぞ」

「かまわん」

他人の食べている食い物はいつも旨い。僕等は「どうだ？」「うん、わりかしいけるな」などと

言葉をかわして、またぞろ沈黙の中で麦飯をかきこんだ。
「ムム」と言ってジョウジがまゆをしかめ、きゅうすを取り上げた。そして、その注ぎ口に吸いついて直にぐびぐびと茶を飲んだ。
「アッ、汚い！」僕は叫んだ「何すんだよ」
ジョウジはためいきを大きく一ツついて、涙ぐんだ。そして、きゅうすを杖の上に戻して言った。「あァ苦しかった。メシが胸へつかえちまったんだよ。あァ死ぬかと思った。」
「そんなに慌てて喰うからだよ」
「そうだな。あァ、メシくらい落ち着いて喰いたいもんだ」
ハシの先に挟んだタクアンをしみじみ眺めて、ジョウジがつぶやいた。そりゃ、メシくらい、落ち着いて喰えばいいだろう。誰もお前に「できるだけ全速力で喰え」なんて頼んでないよ。
ストーブがゴウゴウと音を立てて熱い息を吐きかけてくる。もうすっかり、冬らんまんである。たてつけの悪い戸のすき間から風が忍びこんで来ては、ちょっかいをかけてくるのだ。「おう、寒い」と僕らはつぶやき合った。
「今年、スキー行かね？」キャベツの千切りをくわえて、ジョウジが言った。
「遠慮しとくよ。スキー出来無いし」
「そうだったな」詰まらなそうに、ジョウジが言った。
「まァでも、おれも下手くそだしな、スキーはだめだな」
・・・・・そういえば去年ジョウジはスキーに行って左手首を手ひどく骨折していたっけな。
僕は渋茶をひと息に飲み干した。
「どこかに行きたいよなァ」とジョウジ。
「どこでもないところへね」と僕。
「どういうわけだか、旅がしたくてたまらないんだよな。『ここ』ではない、別の場所へ行きたくなる。『ここ』が嫌いなわけでもないのに」
「そりゃ、居場所に不満があるやつだけが旅に出るわけじゃないよ」
「そうか」ジョウジはぐっとそり返って、背もたれに身をうずめた。「そうだよな」
しばらくそのままジョウジは背もたれに身をうずめて、タバコのやにで汚れた天井を見つめていた。ジョウジの茶碗が空っぽになっていたので、きゅうすを取り上げて注いでやろうとすると、彼はそれを手で制した。そして、ハジかれたように身を起こして、言った。
「なァ、もうおれたち若くないんだよな」
「何だよ」突然にそんなことを言い出されても、こっちは戸惑うばかりである。「出しぬけに何を言ってるんだよ」
「俺たち、もう若くはないんだよな」ジョウジは言った。「最近、よくそんな風に思うんだ。朝、起きる踏ん切りがつかないでフトンの中へくるまってる時だとか、バスを待ってるときだとか、そういう宙ぶらりんの時間には、そんなことばかり考えてるんだ」
「珍しくペシミスティックになってるな」と僕。
「別にペシミスティックになってるわけじゃァないよ」少しムッとしてジョウジが言い返した。
「ただ感じたままを言っているだけさ。おれは別に年をとったということを悲観しているわけでも、楽観しているわけでもない」
「何か、体力的に衰えを感じたとか？」

「いや。そんなわけでもないけど」ジョウジはもどかしそうに言った。「うまく言えねぇよ。おれ、小説家でもないし、説明なんてできないよ。ただ、折にふれて思うんだ。『あァ、もう俺は若くない』て。」

それっ切りで、その話題はおしまいになった。そして、僕はツメをみがき出し、ジョウジはアイマスクを付けていつものように３０分間の仮眠をとり始めた。昼休みも終わろうかという頃、バイトの女の子が出勤して来た。彼女は「お茶もらいますよー」と言うなりきゅうすの渋茶を湯呑みに注ぎ、一息にのみ干した。止める暇もなかった。

2

仕事がハネた後、家に帰ってぼんやりテレビを観ているうちに、僕は何だか歌でも歌いたいような気分になって来た。

久しぶりに路上で弾き語るか。僕はギターを持って表へ出た。

バス停二区間分ぐらい歩いて、K橋へ行った。僕はコートを羽織り直し、橋の欄干にもたれた。ケースからギターを取り出す。抱える。足早に人々が歩いて来ては去ってゆく。みんな、僕に目もくれず歩いて来ては去ってゆく。時おり僕に視線を投げかけてくれる人もいる。鬱陶しそうに、邪魔者を見る目で僕を見る人たちだ。

そういう人たちはしごく正常だ。だってこの僕だって、家に帰っている途中、自分の進行方向にどっかり座りこんでギター抱えているうす汚れた男を見とめたならば、まず間違いなく不愉快な気分になるだろうから。しかし、悪いとは重々承知しつつも、歌わせてもらうよおれは。と、僕はチューニングを始めるというわけだ。

しかし、しかし、である。そうした冷ややかな視線のためか、もっと冷ややかな北風のためだか、チューニングを終えたとたんに、歌う意欲がみるみるうちにしぼんでいってしまった。あれ、おかしいなと思いつつ歌い始めたが、一曲完奏せぬまま、途中でやめにしてしまった。やたらと寒かった。不思議なことだと、僕はまるでからっぽになってしまったかのような自分自身の中身を抱えて思った。ちっとも楽しくない。むしろ家で酒でも飲んでた方がよかったみたいだ。ほんの十五分前はあんなに歌いたくてたまらなかったのに。

そんなわけで僕は、欄干にもたれたまま、鬱陶し気な顔つきで道行く人を眺め続けた。ギターも弾かず、さりとてケースにしまうわけでもなく抱えたままで座っていた。僕は夕やけ空に目を転じた。見れば見るほど、ばかばかしい空だった。

ふと、僕はあることに気付いて「おや？」と思った。それは、街並の向こうにそびえ立っている工場のエントツである。そう、僕が仕事のあいまにいつも窓から見ている、あのエントツである。

エントツは、たしか四本のはずである。がしかし、今、夕やけ空の下街並の向こうに見えているそれはたった三本しかないのである。

目をこすって見た。三本である。目をこらして見た。やはり三本である。これはどうしたことだろう。まさか、あのどでかいエントツの一本が。忽然と消えてなくなってしまったとでもいうのだろうか。そんなことがあるはずもない。

しかし、いくら見直しても三本は三本であり、やっぱり一本足りないのであって、これはどうしたことなのだろうか。何か超常現象でも起こったのか。それとも僕の気が狂ったのか。
「なァ、ちょっと」僕はちょうど脇を通りすぎようとした健康そうな高校生のアベックに声をかけた。二人はどきっとした顔をして僕を見た。そりゃそうだろう。道ばたでアコギを抱えて座りこんでいる、乞食然とした見知らぬ男に突然声をかけられて、驚かないはずがない。
「なんですか」と男の子がオドオドしながら問い返してきた。女の子は目をまん丸に見開いて、男の子の手をさらに強く握ったようであった。僕は気にせずに尋ねた。
「あの向こうに見えるエントツさァ、四本あるはずじゃん？」
「はあ」
「でも今、三本しか見えないじゃん」
「はあ」
「おかしいよな」
「はあ」
駄目だ。会話が成り立たない。女の子がまゆをしかめた泣きそうな顔で僕と男の子の顔を交互に見ている。ヘンなおやじが難クセをつけて来た。と言いたげである。「じゃ、失礼します」と男の子はだしぬけにがくんと一つおじぎをして、女の子の手をひっぱって足早に立ち去って行った。大急ぎで立ち去って行った。その後に一鹿の風が立った。
まぁ、「四本だ」と思っていたのは、単に僕のかん違いかも知れない。目の前の 3 本こっきりのエントツを見ている内に、僕は自分の記憶をうたぐり出していた。そうだ、おそらく今まで僕は思い違いをしていたんだろう。結局僕はそう結論した。そう結論せざるを得なかった。そして歌を歌う気は完全になくなってしまった。僕はギターをかつぎ、バス停二ツ分歩いて家に帰り、酒飲んで寝た。

あくる日、僕はいつもより早く仕事場へ行った。「お、今日は早いな」というジョウジの声を背に窓辺へ歩み寄り、ブラインドを一番上まで引き上げた。
四本だった。
「どうした？」とジョウジの声がした。
「何でも無い」と答えた。

3

「この川べりですか」
「ええ、そうです」
不動産屋に案内されて、土手の上を歩いてゆく。奇妙な静けさが辺りを満たしていて、ミニチュアのように見えるアパートや、新幹線の高架橋がはるか前方に鎮座していた。雲ひとつない青空で、こんな気分の好い天気の日だったらどんな物件を紹介されても喜んで手付金を支払ってしまいそうで、少し不安だった。
「しかし本当に歩いて五分なんですか、駅まで」
「ええそうですとも」

僕はこのおやじの少々調子のよすぎる相づちが好かない。
「どう考えても二十分はかかりそうですが」
「そんなばかな」と不動産屋は笑った。
「カタツムリじゃアあるまいし。私みたいな老いぼれでもゆうに五分で行けますさ」
ふと空を見てみると、長く長くヒコーキ雲が伸びていた。なかなか見応えのある直線なのでぼんやり眺めていると、「お客さん、こっちです」と傍で不動産屋のシャガレ声がした。

件の部屋はそう悪くもなさそうだった。過もなく不過もない、何の変哲もない貸問である。
「どうでしょう」
「フウム・・・・・・」
僕は考えているフリをしていた。本当は、何も考えていないのである。
「これだけの広さでこんな家賃の部屋、探したってそうそうあるもんじゃアありません」
「広さはドウでもいいんです」僕はちょっと反抗してみた。しかし元来が気弱なので、すぐに「まァ、広さも重要ですが」とつけ加えてしまった。
不動産屋のおやじはデップリ肥ったはげ頭で、まるでマンガに描かれるために生まれて来たような人間である。これでシルクハットでもかぶってバナナの皮を踏んづけてひっくり返ればアメリカのドタバタ映画になるし、パイプくわえてサスペンダーを付ければ絵本に出て来る木こりになる。冬だというのに、しょっちゅうハンケチで汗をぬぐっている。暑苦しい。
「車の音とかは、うるさくないですかね、この部屋は」と僕はぐるぐる部屋を見回して言った。
「もちろんですとも。防音は完璧ですし、そもそもこの辺りは閑静な街ですから」
「日あたりはどうですかね。」
「最高ですよ。ベランダに出てみますか？素晴らしい太陽の恵みですよ」
さァどうしますか、と言いたげなおやじの息づかいが聞こえて来る。僕は窓辺まで歩いて行った。草がしげりたい放台にしげっている土手、高架橋、どこまでも青い空などが見え、そして先刻眺めたヒコーキ雲が伸びていた。ガラガラと窓を開けた。風が吹き抜けた。冷たい風である。シモヤケになりそうな風である。
ふと僕はその冷たい風の向う、ずっとずっと向こうに、あの例の４本のエントツを見た。この部屋からも見えてやがる。僕は苦笑した。
「ねぇ、ちょっと・・・・・・」僕はおやじを招き寄せた。
「向うに四本エントツが見えるでしょう」僕は指差しながら言った。
「ええ。」
「不思議なことですがね、この間は、三本しか見えなかったんですよ」
「あァ、あなた、Ｋ橋へいらしたんでしょう」
僕は絶句した。「なんでわかるんです」
おやじは少し得意そうに語り出した。
「あのエントツの内の一本が消失しちまうというのは有名なはなしでね。『おばけエントツ』なんて私らが子供らの頃は呼んでいました。でも何、タネを明かせばしごく簡単なことです。Ｋ橋から見て、四本の内の二本が一直線上に並んでるんです。（とおやじはチラシのうらにボールペンで図をかいた。）だから四本が三本に見えるんです。場所によっては、四本が二本に、それどころか、

四本が一本に見えることだってあるんですよ。」

僕はヒザから下の力がガックリと抜けてゆくような気がした。何て呆気ないはなしなんだ。大げさかもしれないが、この窓から見える風景、草のしげった土手も、高架橋も、青い空も、ヒコーキ雲も、みんなみんな、コーヒー茶わんに垂らしたミルクのようにぐるぐると弧を描いて消えてしまいそうに思えた。

別にそれが原因でというわけではないのだけども、僕は結局手付け金を払わなかった。引越し先を見つけるのは、年が明けてからにしようと思った。何も、こんなに忙しい年末の時期にやらなくたっていいだろう。そしてよくよく考えてみると、引越しをしようとする意志すらもが、そんなに強いものではないようだった。

実にいい天気の日だった。帰り道、僕はもう一度このアパートを見ておこうと、ややセンチメンタルな気分に包まれながら土手の上で立ち止まり、ふり返った。

二階のベランダに干された汚いサルマタが風にはためいているのが見えた。

幻滅して、僕は回れ右してまたぞろ歩き出した。あまりに今日は天気が良すぎたのだ、と僕は思った。

土手の斜面で、ひとりの少女が器用になわとびをしているのが目に入った。かの女が地面をける音と、なわが空気を切る音と、彼女の「ハッハッハッハッハッハッ」というこまかい息遣いが混ざり合い、溶け合って、リズミカルに聞こえてきた。僕は、やたらと耳につく彼女の息の音に少し胸苦しさを憶えながら、その傍らを通りすぎた。

四本のエントツが青空へ向かって、せわしなくけむりを吐き続けていた。少女の息遣いのように。

4

相変わらずジョウジはカキフライ弁当をがっついていた。

「またそれかよ」と僕が言うと、ジョウジはメシツブを口のヘリにひっつけたままで「そういうお前こそ」と僕の弁当をアゴでしゃくった。そこには円いハンバーグが鎮座していた。

変わり映えのしない、日付け以外は何も変化しない、判で押したような毎日であった。喰い終えて僕らは際限なく渋茶を飲んだ。

「ところで、引越し先はもう決まったのか」とジョウジ。

「いや。引越しは年が明けてからすることにしたよ」

「そうかい」

僕は色々と試行錯誤を重ねて茶柱を立てようとしたが、うまくいかなかった。テレビでは、昼前の天気予報をやっている。「今年の冬は冷えこむらしいぜ」とジョウジが知った風な口をきいた。

「そうみたいだな」吹きこんで来たすき間風に、僕はブルブルと身ぶるいをした。

「また悪いカゼが流行るんだろうよ」

「困るな、おれたちなんか、バカなのにしっかりカゼひいちまうもんな」

「全く救いようがないよ」ジョウジは大きく、くしゃみを一ツした。そして鼻をすすり上げすすり上げして、言った。

「なァ兄弟よ、俺たちゃもう若くないんだ」
「わかってるって」僕はにが笑いして答えた。

※

僕はまたギターを抱えて、K橋の欄干にもたれて座りこんでいた。不味くはないが旨くもないカップ酒を片手に。さっき拾った百円玉で、少しく幸福な気分で買った酒である。僕の幸せは、カップ酒一杯分である。いや、それでもう充分すぎるほど、充分だ。

足早に人々が歩いて来ては去ってゆく。面白いほどの無表情である。時おり笑顔の人もいる。しらじらしいばかりの笑顔である。風が吹けばみんなコートのエリをかき寄せて、元々早い歩調を更に早める。今年の冬は、冷えこむのだ。

向うから二人連れの高校生が歩いて来た。どこかで見た顔だ。二人は笑顔を絶やさぬまま、僕になるたけ目をやらぬようにしながら脇を通りすぎて行った。しばらくして、やっと思い出した。いつぞやここで僕は、今と同じようにギター抱えて座りこんでいた時、この二人を呼び止めてエントツの本数を尋ねたのであった。僕は仲むつまじいお二人さんにむかって「ひゅう」と口笛を吹いたが、それはすぐにくるくると寒風に巻き上げられ、続いて通りかかった高校生の一団によって粉々にふみくだかれて消えた。

リズミカルな足音をひびかせて、高校生が通ってゆく。ふいに僕の胸のうちに、ジョウジの「もう若くないんだ」という声がフィードバックして来た。おっしゃる通り、と僕はつぶやいた。少々ひといきれに酔いながらもうひと口、カップ酒をのんだ。そしてタメイキとともに「もう若くないんだ」とつぶやいた。

高校生の一団が通りすぎた後、ほんのひと時、静けさが橋の上であぐらをかいた。そいつは僕の肩をぽんとたたいて、からから笑いやがった。

鼻の中に静寂が流れこんだので、僕はくしゃみをひとつした。

鼻水を乱雑にハンカチでぬぐって、ふと顔を上げてみると、全部のエントツが消滅していた。

僕は、すっかり寒々しくなった夕空を見やりつつ、こう寒くちゃあエントツだってやり切れないんだろう、と思った。

（二〇〇四年十一月二十三日）

白ネギとアゲの味噌汁

1

用意するものは、昆布、煮干、花がつお、アゲ、白ネギ、赤だし、である。まず初めにだし汁を作っておく。だし汁はナベに水をはり、昆布と煮干しを放り込んで放置したものである。この際に、煮干しの頭の部分とはらわたの部分は取っておく。これが実に機械的な作業で、こればっかりやり続けていると、そこはかとなく哀しくなってゆく。

僕はぼろずぼんを履いた足をコタツの中でつっこんで、黙々とその作業を続けている。外は冬である。時おり、がたがたとガラス窓が揺れ動く。風のせいである。僕は窓の外を見る。熟し切ったシブガキが落ちて、つぶれている。あんまりにも寒そうなので、チャーコ（犬）を部屋の中に入れてやった。チャーコは部屋のすみで丸くなっている。僕は煮干しの頭をほうってやる。チャーコはそれをぺろりとたいらげる。

こうしてコタツに入っていると昔のどうでもよい出来事が自分の中によみがえって来て、いっそうウスラ寒くなるのである。僕は何の脈絡もなく、二年前に先輩が我が家へ遊びに来た時のことを思い出した。

僕と先輩は散歩に出かけた。先輩はみちばたにすっくと伸びている、たわわに実ったイチジクの木を見つけて、その果実を一ツもいだ。僕は驚いて「アッ」と言った。どろぼうである。先輩は僕の分も一ツもいで、呉れた。僕は「どうも」と言ってそれを受け取った。共犯である。

盗んで喰っておいてこう言うのは何だか、ひどくまずいイチジクだった。が、ちらりと先輩の方をうかがうと、先輩は顔色一ツ変えないでそれにかぶりついている。僕らは無言のままで赤ムラサキの果肉をほおばり、汁の垂れた手をずぼんの尻でぬぐったりして、歩いていた。

「なァ」先輩が出しぬけに口を開いた。「若いうちに結婚なんてするもんじゃないな」

僕は少々面食らった。答えを考えあぐねていると、先輩は続けた。「あれは、枯れてからするもんだ」

「どうしたんすか、急に」と僕は言った。

「結婚なぞおそろしく退屈なもんだぜ」イチジク色に染まった唇をぬぐいもせずに、先輩は続けた。「なぜそんなものに憧れていたのか、サッパリわからない。結婚したがっていた頃のおれの頭を、かなづちでかち割ってやりたいよ」

「昔から結婚は人生の墓場だ、なんて言いますよね、そう言えば」と僕は言った。

「昔の人の言うことは正しい」と先輩。「考えてみろ。婚姻届けに判を押すのは自分の墓石を刻むようなものだぜ」

そう言ったっきり、先輩はしばらく黙り込んでムシャムシャとイチジクを喰っていた。しかしそのうち、僕の顔に浮かんだ困惑の色に気付いて、慌ててつけ加えた。

「いや、別におれは、由美子に飽きたとか、そういうわけじゃないんだ」

先輩は四年前に結婚したのである。由美子さんというのは先輩の妻君だ。うりざね顔の、どち

らかと言えば（どちらかと言わずとも）古風な日本的美人である。
先輩は一口イチジクをかじり、話を続けた。
「別におれは由美子に嫌気がさしているわけでも、由美子とうまくいっていないわけでもないんだ（先輩はこれを自分に言い聞かせるように、一語一語をかみしめ、ねぶり回すように言った）。おれはただ、結婚という制度が不条理だ、と言っているまでのことだ」
はぁ、と僕は答えた。
「結婚する時まではこんな素晴らしい制度はないと思う。しかし、いくらたぎっていたとしても水に戻らない熱湯はないのさ」
やっぱり由美子さんに飽きたんじゃないんですか。僕は聞こえぬようにツブやいた。
また先輩はだまりこんでしまった。僕もだまりこむ。言うことも言いようもないからである。先輩はイチジクを喰っている。車がわきを通りすぎ、砂ぼこりが舞い上がる。くそったれな青空のばかさ加減が哀しい。
「君は何年目だっけ」
しばらくして、先輩が言った。
「僕ですか。二年目です」
「そうか、二年目か…」先輩はねぶり回すように復唱した。「じゃァ、平穏無事だな、まだ」
「ええ、一応」
「もう少し年が経って、何ひとつ変わっていないことを祈ってやるよ」先輩はそう言って、残ったイチジクの最後のひとカケラを口の中へ放りこんだ。後には何も残らず、くそったれな青空があるだけだ。僕と先輩はだまりこんだまま、重たい足をひきずって歩いた。

あの日から、もう二年経った。僕もとうとう、あの時の先輩と同じ、四年目である。

2

コンロに火をつける。そして、昆布と煮干が入ったままのだし汁を炊く。沸騰したら、昆布と煮干をすくい上げ、煮干は犬か猫にでも遣り（もちろん、冷ましてから）昆布は細かく刻んで具にする。昆布は思いきりヌラヌラしていて切りにくいことこの上無いが、そこはガッツでカバーする。すくい終わったら、花がつおを入れ、だしを取る。昆布と煮干とかつおのハーモニーである。
こうして、どんなにのん気にみそ汁を作っていても、どうしようもなく時間が余ってしまうのは、ここのところ小説の注文が無くなってしまったからである。つげ義春のマンガで、主人公であるところのマンガ家が、「最近マンガの注文が途絶えて私の心も穏やかだ」と独白しつつ掃除をし、体操をする、というようなシーンを読んだことがある。僕もそれにならって、この花かつおを引き上げたら体操をしてみようかしらんと思う。
「あなたは本当に不器用な生きかたしか出来ないのね」こうある女の子に言われたことがある。さすがに僕もムッとして、針の穴に糸を通せもするしオリヅルだってキレイにおれるさ、そんな僕にむかって不器用とは何ごとだ、と言うと、かの女は阿呆を見る目で僕を見た。しかしかの女は正しいだろう。僕が最近やっていることと言えば、例えば新聞をスミからスミまで読んでみた

り（やりもしないのに株式欄を読むのは少々しんどい）、環状線に乗ったり、昼寝をしたり、それから・・・・・・もう後が思い付かない、とにかくそのようなことばかりである。

環状線に乗るのは金がなく暇があるノラクラ者にオススメである。わずかな小銭でキップを買い、一日中電車へ乗ってぐるぐる街を回り続けるのである。昼下がりなどは車内がガラガラで、電車一本貸し切りにしているような気分にもなる。しかし次第にそんな雄大な気分はフェイドアウトして行き、仕舞いには回転ずし屋のスシネタのような気分になってくる。いつの間にやら夕暮れが近づいている。

さて、そんな事をやってはたして面白いのか。

無論、面白くも何ともない。

それから日がな一日散歩をしたり、床屋へ行ったり、長ネギとアブラアゲを買ったりなどしている。何のことはない、僕は哀しい自由人なのだ。

さて、僕は問いたい。・・・・・・おれはここで終わりなのかね？

ところで、この前のことである。僕は真昼に朝刊を読むという言語道断なまねをしながらメシを喰っていた。そこに、友だちのNが電話をかけて来た。話があるから会いたい、と言うのである。

こういう時の「話」は十中十、ロクなものではない。しかし、Nは僕の長年の友人である。幸福なメシを中断してロクでもない話を聞いてやることぐらいは、友だちとしてやって当り前のことだろう。僕はハシとタクアンと新聞を放り捨てて、Nが指定した喫茶店へ向かった。

Nは入り口から三番目の席に座って、僕を待っていた。両ひじをつき、両の手の平で頭を抱えるようにして待っていた。どことなくそれは、胎児を思わせるポーズであった。

Nはなかなか僕に気付かなかった。僕がNの前に座り、「おい」を言って初めて、彼はゆっくりと顔を上げて、充血した目で僕を発見したのである。

「おう」と彼は言った。

僕はホットミルクティーを注文した。メシはもう喰ったのか、とNが問うた。喰ってたのを途中やめにして来たよ、と僕は答えた。そりゃ悪かった、とN。じゃぁ、帰ってつづきを喰うのか？

――いや、そのつもりはない、と僕。変なこと聞くやつだな、と思った。

ほどなくして、ミルクティーがやって来た。僕は砂糖ツボを引き寄せた。その時、Nが口を開いた。「おれ、アイスランドに行くことにした」

僕は砂糖ツボに手を触れたまま、静止した。

僕はきっと、聞き間違いをしたのだろう、そう思って聞き返した。「え？何だって」

「おれは、アイスランドに、行くことにした」一音一音をテーブルの上へ並べて置くように、彼ははっきりと発音した。

「何でまた突然」僕はそう尋ねるので精一杯だった。僕は腹の底から驚いて、全身の動きがぴたりと止まってしまったのだ。いや、驚いた、というより、理解不能、という状態にむしろ近い。

「日本に居たくなくなったんだ」Nはそれだけ言った。

「何故」と言いかけて僕は思い当たった。「あれか」

「うん、あれだ」とN。

あれ、というのは、この間、Nが七年間付き合っていた彼女と別れた件である。
そう、Nは七年間付き合っていた彼女と別れたのだ。しかもクリスマス目前の12月8日、折しも真珠湾攻撃のあった日に、であった。その理由というのがまた（こう言っては悪いが）傑作で、Nが八宝菜を作るのをしくじった彼女をなじったため、だという。
何やらコゲくさいにおいがするのでキッチンへ行ってみると、彼女は黒焦げになった野菜でいっぱいの中華鍋を手におろおろしていた。Nは「うわァこりゃひでぇ。八宝菜なんか失敗するなよな、ドジ。ほんと使えねぇ奴」というようなことを言ったのだという。すると彼女は、コゲついた鍋を床にうち捨てて、泣きはらした目でキッとNをにらみつけ、「そんな言い方ないでしょ！」と癇癪を爆発させ、そのまま家を飛び出した。そして行方が今に到るまで、わからないのである。
「なんてすごい捨てられ方をしちまったんだ、お前は」僕は初めてこの話をNに聞いた時は思わずそう言ったものだ。
「うるせェ」とNは言った。
とは言え、八宝菜は最後の引き金となっただけなのだろう、と思う。それよりもずっと以前に、彼らの幸福は崩れ去っていたのだろう。
まあ、それを考慮してみれば、確かにアイスランドにでも行きたくなる気持ちもわからないでもない。わからないでもないが、やっぱりわからない。特になぜ行き先をアイスランドに決めたのかというあたりが理解不能である。その点を問うてみると、
「別に、行き先はどこでもよかった。アメリカでもロシアでもインドでも中国でも。
ただ、何か冷え切っちまったおれにはアイスランドがお似合いかなって思っただけのことだよ。
（僕は「何のひねりもない野郎だな」と思った）
おれは旅行に行くんじゃないんだ。目的は国外脱出することで、アイスランドに行くことじゃァないってことを、わかってくれ」
ひょっとするとこいつはビョークのファンだったりして、などと心の片すみでしつこく勘ぐりながら、僕はホットミルクティーをすすった。きわめてまずい茶だった。ここまでシナモンをふりかける必要もあるまいに、と思った。
「また一からやり直したいんだ」とNは言った。
「何をだよ」
「おれの人生をだよ」とN。「過去をバッサリ断ち切って、これまでの一切を忘れて、知ってる人が誰もいない、知ってるものも何もない場所でやり直したいんだ。だから」Nは言葉を切り、そしてまた吐き出した。
「だから今日は、お前にさよならを言うために呼んだんだ」
僕はしゃぶっていたティースプーンを置いた。
「要するに絶交というわけだな」
「そう。」とN。「でも別にお前とだけ絶交するわけじゃない。さっきも言った通り、おれはすべてと絶交するつもりなんだ。わかってくれ」
「向う（アイスランド）では、何のアテもないわけだな」
「そう。」
「知り合いも」
「当たり前だ。もちろん、ない」

「仕事も」
「だから、ないって」
「そうか」
それっ切り、何となく我々はだまりこんでしまった。Nはうつむき、僕は窓の外に目をやった。スクランブル交差点はさすが休日だと言うだけあり、どこからわき出て来たのだろうかだか、人間でごったがえしている。大して幸せそうにない人々で混雑している。はたしてアイスランドにもスクランブル交差点はあるのか、そこもやはり人間でごったがえしているのだろうか、こんなくそったれな休みの日に。そしてアイスランドでこの僕の前でうなだれたいる男は、どんな顔をしてその雑踏の中へ入っていくのだろうか。或いは入らないで一日をやりすごすのだろうか。店内にはプロコルハルムの「青い影」が流れていた。それからコーヒーのにおいも、タバコのかおりも、流れていた。しかし、空気はよどんでいた。
「耐えられない」
だし抜けに声がした。
「え？」僕は聞き返した。
「耐えられないんだ」Nはうつむいたなりで言った。「すべてが、死んでるんだ。俺はすべてが死んだ街なんかじゃ、生きていけないんだ」
僕はムラムラと別の感情が胸の内でふくれ上がってゆくのを感じた。この目の前へ座っているウサギみたいな目をした、情けなく、しかし不遜な男が腹立たしくてたまらなくなってきた。おれはこんな野郎のために昼飯を中断させられたのか、と思うと、やり切れず、しかもウサギ目男はそんな哀れなこのおれを「死んだもの」のカテゴリーに入れ絶交を申し渡し、じめじめと独り言を言うぎりしているのであり、気が悪くならないわけがない。僕も方も、もう耐えられなくなった。
「違うなァ、まったく違う」と僕は言った。「全然、違うんだなァ」
Nは顔を上げた。
「死んでいるのは、『すべて』じゃなくて、おまえなんだよ。わかるか？
そんな根性でいるなら、アイスランドへ行っても、やっぱり『ここもまた日本とかわらず、死んだ街だ』なんて思うだけだろう。お前は周りをとっかえようとばかりしていて、肝心かなめの自分をとっかえようとはしない。周りをとっかえても、自分がそのまんまなら、たいして何も変わりやしないさ。
アイスランドまで行っても、自分からは逃げられないだろうよ。」
言い終えて、僕は急に脱力した。ティースプーンをつまみ上げることすらも面倒くさかった。Nはまばたきもせずに僕を凝視していて、その視線がとてつもなく気まずかった。
そのまま、何分間か経った。
何か言え、何とか言え、と僕は部仏頂面の下からずっとNに向かって念じ続けていた。
さらに、何分間か経った。そのままで、である。
「青い影」がおわった。
ようやっとNは口を開いた。
「違うのはお前の方だ」とNは言った。「お前の意見は、七年間貢いでいた女に捨てられたことがない野郎の言いぐさだ」

——しかも八宝菜が原因で。

3

だし汁が出来れば後は具である。まずアゲは熱湯をかけ油抜きし、細く切る。白葱は小口切りにする。そして、アゲ、葱、それに先程ガッツで切ったコンブを鍋の中へ入れ、赤だしをおたま一すくい溶かす。鍋の中は熱い。手が湯気で湿ってゆく。

窓の外を見ると、雪が降り始めていた。

今日は一日中寒かった。朝から厳寒だった。

——厳寒で、最悪の朝だった。

目覚めてしばらく僕は自分が誰なのかわからず、そうして隣りで寝ているのが誰なのか思い出せなかった。思い出してやり切れなくなった。

これが——おれで——そしてこれが——きみだ——アァ・・・・・・。

きみはここのところ仕事が大変に忙しいというので、毎朝早く出て行っては、夜も遅くに帰ってくる。帰って来る時はいつも、息が酒の味である。テーブルの上に伏せてある茶碗を真っ赤な目で一べつして、「今日は外ですましてきたわよ」と回らぬ舌を回して言い、そしてすぐに寝る。寝息が、結核患者のごとく荒い。後は、朝が勝手にやって来るだけである。

僕は魚のような目で、まだ目覚めていない君を見た。

ずいぶんと年を経ったように見えた。

僕は彼女を起こさないように、ゆっくり布団からぬけ出して、キッチンへ向かった。

アイスコーヒーのパックを取り出して、口をつけてごくごくと飲み下した。その苦さにへきえきした。ごまドレッシングをかけたサラダがまだ冷蔵庫の中へ残っているはずだった。はたしてそれは、思ったよりも奥の方へ置かれていて、思ったよりも少なかった。それから、先日ジョウジがお土産に持って来た野菜ジュースを取り出して、コップにあけた。あまり僕は野菜ジュースは好きではないし、サラダに野菜サラダという取り合わせもどうかと思ったが、取りあえず僕はサラダの入ったガラスの器とジュースのコップをテーブルに並べた。

そこで、彼女が上半身を起こしているのに気付いた。神妙な顔付きをして、コメカミに指をそえている。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・。」

僕はストローから唇をはなした。

「お早う。朝ごはん食べる？」

「・・・・・・・・・・・・・・要らない」

ガラス器の底に沈殿したドレッシングのような口調で、答えた。唇が青白く、いや、唇のみならず、顔全体のぬくもりが消えていた。そして彼女は、今まで僕が耳にしたことのないようなカスレ声で、

「・・・・・・・・・・・・・・・お水ちょうだい」と言った。

僕は、コップに一杯水をくんで、サービスもかねて氷を二ツと、薄切りのレモンを一枚浮かべた。しかし、彼女は氷やレモンは完全に無視して、苦い薬でも飲むようにその水に口をつけた。
僕は、ほおづえをついてそんな彼女のしぐさを見ていた。彼女はずいぶんと長い時間かかってそれをカラにした。水を含んだレモンがコップの底へへばりついた。そしてまた彼女は神妙な顔つきに戻り、コメカミに手をやった。
彼女はコメカミに手をそえたまま、化粧台の方へ歩き出した。あァ、これほどまでにひどい宿酔いと必死で戦いながら、彼女は歩みを進めているのだ！化粧のためだけに！と僕は思った。詩が一本書けそうだな、と思った。
やがて、ペンキぬりを終えて、彼女はよろよろと戻って来た。髪の毛を両手で耳の後へ回し、たばねるのかと思いきや、すぐに手を離して、また元通り肩へ垂らした。
「今日いつごろ？」僕は君に向かって問うた。
「何が？」と君。
「いつごろ帰るの？」
「知らない」
そしてきみはショルダーバッグを肩にかける。
「お水ありがとう」
そう言い残してきみは出てゆき、ドアの音がする。
僕は部屋の真ん中に居る。
まだ朝刊も届いてはいない。

4

コンロの上に、みそ汁の入った鍋が座っている。みそ汁はしんと冷え切っている。その様子はまるで、誰かを待っているかのように見える。みそ汁も誰かを待ったりするのだろうか。そしてこれは阿呆らしい問いかけなのだろうか。
僕はみそ汁を作り終えてしまったので、することがなくなってしまった。虚脱したように座り込み、ぼんやりと項垂れる。
少しだけ空気の温度が上がったのだろうか、表で降っている雪がいつの間にか雨に変わっていた。雪は音もなく降るが、雨は音をともなって降る。その音が僕を不愉快にさせる。ザアザアという雨の音が僕の耳に聞こえてくる。僕は音を消してテレビをつけている。再放送のバラエティー番組だ。ゲスト出演のタレントたちが笑い転げているが、僕に聞こえているのは表の雨の音のみである。
今日もまた、きみはみそ汁を食べないのだろうか。早く帰ってくる、なんてことは有り得ないのだろうか。
・・・・・・そんなことを考えても面白くないので、僕はチャーコにお気に入りのボールを投げてやる。チャーコは前足でぐっとそれを押さえて、あむあむと生がみしている。犬らしくもない、ゆったりとした仕ぐさである。
ずぶぬれの猫が、アスファルト道をとぼとぼと歩いてゆく。時おり立ち止まって、ブルブルッと身を震わせて雨粒をはじき飛ばす。しかし、ブルブルッとやるしりからまた水びたしになって

しまう。猫の目は投げやりな光をおびている。
水しぶきを上げながら自転車がゆく。前傾姿勢になってカサをさし、懸命にペダルをこいでいる。彼がどこへ行こうとしているのか、僕は知らない。
僕はそんな情景を何をするでもなく見ている。森羅万象がそのままの顔付きで、何の質感もたずにこの部屋の周りをぐるぐると回っている。
いつまで降るのか、この雨は。空が暗いのは雨雲のせいなのか、日没のためなのだろうか。僕はコタツに入っている。もうそろそろ、考えをめぐらすタネもつきてきたし、第一疲れた。何もしていないのに体が耐え難くだるかった。さりとて寝る気もなく、僕は宙ぶらりんな状態で、あったかいコタツに抱かれて雨の音を聞いている。外は冬である。心のかたすみで、たぶん僕一人が食べることになるであろう味噌汁のことを思ってみたりもして、僕は座りこんでいる。
まあ、そんな風にして、僕は毎日、きみが帰ってくるのを待っているのだ。

（二〇〇四年十二月十四日）

フール・オン・ザ・ヒル

僕は、丘の上に小さな家を建てた。

誰も訪ねて来そうにないへんぴな家で、事実、あまり人は来ず、僕は毎日そこはかとなく寂しい思いをしていた。

僕は時おり街へ出て、好物のビスケットなぞを紙ぶくろ一杯に買いこんで帰って来たりもした。家に帰るのは一苦労だ。なにしろ丘の上だから、その坂道たるや言語を絶する代物だ。息切れがして、紙袋を抱えたままで、立ち往生だ。その様子は実に間抜けなことであろう。ビスケットを両手いっぱいに抱えて、長い長い坂道の真ん中で疲れ果てているだなんて。

そう、訪ねて来る人はほとんどいなかった。

あくまで「ほとんどいなかった」であり、「まったくいなかった」ではない。たった一人だけ、訪ねて来てくれる人がいたのだ。

その人は優しく、薄幸な人だった。かの女は三年前から、恋をしていなかった。この先もずっとしないだろう、とかの女は言っている。

三年前、かの女の愛していた人は死んでしまった。カフェテリアで、クラブハウス・サンドイッチをのどへ詰まらせて、まるで嘘のように呆気なく死んでしまったのだという。何もそんな風に死ななくてもいいのに、とかの女は哀しく笑って言った。死ななくてもいい人だったのに。人はみんな死ぬとしても、死に方も死に場所も死ぬ時もえらべないとは判っていても、それでも。

かの女は日曜日の午後にやって来る。言うまでも無く玄関へ到着した時には、息を切らしている。こんなへんぴな場所までわざわざ来てもらって、本当に悪いなあと思う。アップルパイをよく持って来てくれる。かの女はアップルパイを食べるのがとてもうまい。ぶざまに中身を「ボテッ」と皿の上へ落とすことなく、カケラをぽろぽろとこぼすこともなく、実に威厳のある食べ方をする。

僕らは別に特別なことをするわけではない。お茶を飲みながら、たわいのない世間話をするだけだ。真の友だちとは、半日くらいは楽々、おしゃべりするだけですごせるものだ。恋人となると、そうもいかないが。しかし僕とかの女は友だちであり、それ以上でもそれ以下でもない。そして二人とも一週間分の、話したいことを抱えているのだ。本のこと、映画のこと、音楽のこと、政治のこと、友人のこと、真理のこと、過去のこと、将来のこと、自分のこと、他人のこと、その他にも、いっぱい。

毎週日曜日になると、我々は午後をおしゃべりに費やす。その他のことは別に何もしない。する必要もない。

出来ればこうやって、はたから見れば味気ない日々を味わい続けながら老いてゆきたいと思う。

やがて太陽が沈み始める。そろそろ帰らなくちゃ、とかの女は腰を上げる。ドアの所で我々は、フランス人式のあいさつを古風なしぐさで交わし、そしてドアの閉まる音がする。

窓に寄りかかって僕は、かの女の後姿を見送る。かの女が丘を下ってゆくのが見える。かの女

はふり返らない。かの女の背景には海が見える。マリンライナーが走っているのが見える。かの女の背中が少しずつ小さくなっていく。僕はここ、丘の上の家についてもの思いする。そして、これからやり過ごさねばならない、次の日曜日までの長い長い一週間について考える。やがてかの女は見えなくなる。

僕はうまくやっているのか。上手に人生を使用しているのか。それはわからない。

どこかに楽しい場所があり、僕はそこへたどり着けずにいるだけなのか・・・・・。そんなことは知らない。

ただ、総てはすぎさり、掌にひっかかっていたささやかなものが僕の取り分なのだろう。

なに、さびしがり屋さんは僕だけじゃないだろう。今は世界中の誰もが、また月曜日がやって来ることの悲しさや、向き合わなければならない悩み事の数々を思っているのだ。

丘の上の家の中でそんなことを考えている。僕は間違っていて、すべてを見逃してしまったのかもしれないが、とりあえずここに居続けている。

それだけを、わかっている。

（二〇〇四年六月十四日）

しんしん記

1

秋が来ると、トトとヒョーロクは忙しくなるのだった。食べ物が沢山有る間に、冬を乗り越えるのに足りる分、集めておかなければならなかったからだ。トトとヒョーロクは、山の奥深い所に住んでいた。そこでは冬になると、雪以外のものがすっかりこの世から姿を消してしまう。そして二人は、ただ雪にうずもれたままで、じっと息を殺して春を待つのだった。

毎朝、トトとヒョーロクは川へ行って、しかけておいたワナを引き上げて回った。うなぎだの魚だのが、大漁と言うほどでもないがかかっていて、トトは手際よくそれ等をびくの中へ放り込んでいくのだった。トトはまた、家の裏の木立へわけ入って、キノコを採りに行きもした。これはまだ、ヒョーロクが手伝えない仕事であった。何百もあるキノコだ。毒のあるなしを見分けるのは年季の入った山男にしかやれない。毒キノコを喰らってしまうと、どんな恐ろしい目に遭うかは、ヒョーロクはトトからうんざりするほど聞かされていた。

家へ戻ると、トトとヒョーロクは手分けをして、採って来た食べものを腐らないようにする。キノコは焼酎の瓶へ入れて、漬けておく。魚は、ハラワタを取り除いて、空っぽになった腹の中へ飯粒をつめこんで、そしてタルの中へ入れておく。こうしておけば、うまいスシができるのだ。或いは、いろりでゆっくりいぶした後で、天日干にする。そうすれば、たいそうしわい（固い）干物が出来上がる。

そうやって、トトとヒョーロクは暮らしていた。ヒョーロクは生まれてから1度も山を下りたことがない。この人里離れた一軒屋と、空と、山と、川と、風だけがヒョーロクの世界のすべてだった。トトは時おり、薪を売りに山を下りることがあった。険しくてややこしい山道を、柴やら炭やらを背中いっぱいに背負って歩いてゆくのは大変なことで、ふもとへたどりつくまでにたっぷり半日はかかってしまう。そしてトトは町へ行って薪をたたき売り、いくらか手にした銭を懐に農村に立ち寄り、米を買うのだった。本当は酒も買いたいのだが、なかなかそうはいかなかった。

カカは、ヒョーロクが物心つかない内に、死んでしまった。ヒョーロクは、それが悲しくてたまらなかった。ヒョーロクは、カカの顔も思い出すことができなかった。

「何でカカは死んだんじゃ」

小さいころ、何度もヒョーロクはそう言って、トトに詰問した。トトはただ、「わかんねェ」と答えるだけであった。その答えにヒョーロクは癇癪を爆発させ、まるでトトが殺したかのごとく、彼を責めたてるのだった。

ある程度大きくなると、もうそんなことはしなくなったが、ヒョーロクはやはり心に開いた穴が埋めがたいものであることを感じていた。ヒョーロクは片時も、言いようのないさびしさとむなしさを忘れられたことがなかった。

ただ、母が彼を呼ぶ時の「ヒョーロクや」というやわらかな声――それに、その胸へ抱かれた時のあたたかさ――は、かすかにヒョーロクの心の奥へ残っていた。それは、思い出そうとすれ

ばするほど、つかみどころのなくなる思い出であった。しかし時たまではあるが、自分が赤ん坊に戻ってカカのうでの中へいる夢を見たなぞは、そのやわらかな声とぬくもりを、何よりも確かなものとして感じることが出来た。それはこの上なく幸せなことだった。

そんな風にしてヒョーロクは生きていた。

そんな風にしてトトとヒョーロクは山の奥深くで日々をすごしていた。

ところでトトとヒョーロクがくらす山には、奇妙な言い伝えがあった。それは、雪の降る冬の夜に畜生の肉を喰うと、幽霊が出る、というものである。がために村人たちは冬になると絶対に肉を喰らわなくなるのだった。ヒョーロクもこの言い伝えをたいそう恐れていた。ヒョーロクがまだ四つの時、里からやって来た置きぐすり屋が、この言い伝えを信じずにいたために痛ましい末路をたどった侍のはなしを、ヒョーロクに語ってきかせたからだった。

こんなはなしである。

それはそれは昔のことでございます。ある一人のお侍さまが雪の降りしきる夜、この辺りの山道を歩いておいでになりました。ただでさえ急で入りくんだ道であります上に、風も出てまいりまして、かじかんだ手足がだんだんと辛くなられまして、どこでもよいから家の灯が見えたらば一晩泊めてもらおう、と思いつつ歩みをお進めになられておりました。ところでこのお侍さまには一つ、奇妙な癖がございました。それは、あまりに月の美しい夜ですと、ムラムラと何とも言えぬ気もちが湧き上がっておいでになりまして、辻斬りをなさってしまうのです。刀が生身の人間の肉へ喰いこむ時の手ごたえ、ほとばしった血しぶきが月光にキラキラと照らされるその美しさ、そうしたものがお侍さまにはたまらなく愛しく感ぜられるのでした。そうやって美しい月夜になると辻に立って道ゆく人を一刀両断になさり、今までに何十人、いや何百人もの首を肩の上から地面の上へとタタキ落とされておりました。

さて風はいっそう激しさを増し、足元は重たいぼたん雪でうめつくされつつあります。これは困った、お侍さまは思いました。早く山小屋の一軒でも見つけねば、凍えて死んでしまう。

と、そのお侍さまの目の前を、黒い影が横切りました。お侍さまは何者だと刀のサヤを払い、これを真っ二つに斬りました。黒い影はギャッとばかりにぐるんと空中でひと回りして、ドサリと地面へ落ちました。それは一匹のタヌキでありました。お侍さまは拍子抜けなさって、カラカラとお笑いになりました。なんだ、タヌ公であったか。物の怪の類かと思ったわ…。

と顔を上げると、少し先に灯りが見えました。これは助かった。そうだ丁度いい、これを手土産に、とお侍さまはタヌキの死体を持って、その方へ足をお進めになられました。

家の主人は、一晩泊めていただきたいと言うお侍さまの申し出を受けて、それはお困りでしょう、さぁさぁどうぞと戸を開けました。お侍さまはずかずか家の中へ入ってゆきなさり、いろりばたにドッカリと座りこみなさいました。そして先程のタヌキをかかげ、「あるじよ、これでタヌキ汁をこしらえてくれ」とおっしゃいました。

あるじはそのタヌキを見るなり、真っ青になって言いました。「イエ、お侍さま、この辺りの村では、雪の降る日に畜肉を喰らうと、幽霊が出るという言い伝えがございまして、タヌキ汁なぞはもっての他、おあきらめ下さい」

「何を言う」お侍さまは自目をひんむかれました。「拙者の言うことが聞けぬか。聞けぬなら

ばおぬしの首をかっ切るまでのことじゃ。何、恐るることはない。もののけなぞ、拙者の手にかかればすぐにこのタヌキの如く真っ二つじゃ。イヤならおぬしは食べんでもよい、拙者一人で食べる」あるじは仕方なくタヌキ汁を作りました。お侍さまはうまいうまいとたくさんお食べになりました。こんなうまいものを喰わんとは、おろかなことぞ、とお笑いになりながら…。

…と、すっかり鍋の中をカラッポにして、最後の一すくいを口に入れんとした時、お侍さまは突然お椀を取り落としなさりました。「どうなされた」あるじは言ってお侍さまを見ました。お侍さまは真っ青な顔で天井をお見つめになったまま、ぴくりとも動きません。

あるじは天井を仰ぎました。そして、思わず叫び声を上げました。

天井には、何十もの、いや何百もの死人の青ざめた顔が浮かび、ひしめいておりました。ある首は町娘のものでした、ある首は商人のものでした。坊主の首もありましたし、乞食の首もありましたし、ハチマキをした職人の首もありました。それがみな真っ白になった唇のハシから血をたらし、自眼をむき、脂汗をポタポタと垂らし、まさに斬られたその刹那の苦悶の表情と、この世のすべてを焼きつくしてしまいそうなほどの激しい呪詛の念を顔に浮かべて、呻き声を上げているのでした。それはお侍さまが月夜の晩のたびに斬り殺していた人々の生首に違いありませんでした。

あるじは気を失いました。そして翌朝になって目覚めると、天井の首どもは消え去っていて、代わりに傍らへお侍さまの生首が転がっておりました。

お侍さまの生首は、昨日の晩、天井の首どもが浮かべていたのと寸分たがわぬ顔つきを浮かべて、転がっておりました。

「…じゃから、ぼうず、雪が降っとったら、肉ァ喰っちゃおえんぞ。」

ポンとキセルの灰を落として、置きぐすり屋が言った。ヒョーロクは、ふるえながら、大きくうなずいた。

2

その年はどうしたわけだか、魚もウナギもさっぱりとれやしなかった。トトは、いつも通りに仕掛けたワナを引き揚げて回るのだが、どれ一つとして空っぽでないものはなかった。「おかしいわなァ」トトは首をかしげて言った。「いつもの通りにしかけとるのになあ。おえりゃぁせんがな」

それから、ひどく衝撃的な事件が起こった。トトやヒョーロクのように山の一軒屋に住んでいた年寄りの木こりが、キノコにあたって死んだのである。その木こりはもうかれこれ五十年も六十年も山で暮らしていて、キノコ採りをしくじるようなヘマをしでかしたとはまず考えられなかった。

変死だというので、町の医者が巡査といっしょにやって来て、木こりの死体を運んで行った。「何で持って帰るんじゃ、先生は」医者の助手三、四人が木こりをかつぎ上げてタンカへ乗せているのを遠まきに眺めて、ヒョーロクが言った。「そりゃおめぇ、解剖するためじゃ」とトトは答えた。「カイボー?」

「そう。胃袋を切ってな、中身を調べるんじゃ」

その時、ふと医者とヒョーロクの目が合った。ヒョーロクは、まさかわしの胃袋まで切られてしまうんでないか、と恐ろしくなって、火がついたように泣き出した。

程なくして解剖の結果が出た。木こりの胃に入っていたのは昔からそこら一帯でもっともよく親しまれている食用のタケだった。ところが、本来は毒を持っているはずのないそれが、どういうわけだか毒を持っていたという。

「突然変異っちゅうことじゃ」

巡査から話を聞いてきた村長が、寄合いの席でそう説明した。

「何でも今年はでぇれぇ気候がおかしゅうて、そのせいでキノコの性質がガラッと変わってしまったらしいで。当分キノコ採りにゃ行かん方がエエ」

「そういやァ、今年はサッパリ魚がとれんが、それも気候っちゅうもんのせいじゃろうか」

「そうじゃろう、ホレ、里でもサッパリ米がとれん言いようるじゃろう。」

そうなのであった。トトもまた、それでほとほと弱りはてているのだった。町で薪を売り、銭をこしらえて農村を訪れても、農民たちは米を売ってはくれなかった。

「ホンマに悪いんじゃけんどなァ」必死で頼みこむトトに、彼等は言うのだった。「今年ぁ夏が寒かった上に、でぇれぇイナゴが増えよってのう。売るどころか、わしらが食べる分もとれなんだんじゃあ。こならの実を、少しわけてやるけぇ、帰ってくれ」

こならの実というのは、農民たちが、凶作でいよいよ飢えが迫った時に食べる非常食である。どうにもならん、困ったことになりつつあるようだと、トトは頭垂れた。

もうすぐ冬が来る。しかしちっとも、食べものが蓄えられていなかった。もはや、このままでは死ぬより仕方がなく、それをなすすべなく待たなければならないことが、たまらなく恐ろしかった。「魚もおらんわ、米もとれんわ、おまけにタケは毒持つようになりよるわ…」村長はため息をついた。「山の神が怒りよったんか…」

寄合から帰ったトトは、蓑をぬいで戸口へ座りこんだ。

「ヒョーロク、湯ぅわかしてくれ」

「ほい来た」

カマドの上へ水をはったナベを置き、ヒョーロクは火吹竹を手にした。

「お父、今日はキノコ採りにゃ行かんのんか」

「ああ、行かん」トトは答えた。

「お父――」ヒョーロクはふり向いて言った。「どうするんじゃ、もう冬が来るで。食いものが、ちっともありゃアせんがな」

「ああ、ねぇなァ」

「どうすんじゃ」

「わかんね」

チャリ、と、トトの懐の中で銭の音がした。トトは今日も町へたくさん薪を持って行った。この寒さのせいか薪は飛ぶように売れた。しかし、そうして得た銭を持って里へ寄っても、誰も米を売ってくれやしなかった。「銭は喰えねぇ」そんなことを言って苦笑いしたじいさんもいた。「こん、役立たずめ」トトは懐からチャリチャリいうものをつかみ出し、ずかずかとカマドへ歩み寄った。そして、ヒョーロクをおしのけて、カマドの中めがけて力いっぱいそれを投げこんだ。

「アァッ！」ヒョーロクが叫んだ。

ドッと、灰かぐらが立った。
「何するんじゃトト！」
「こんなカナモノ、持っとっても何も役に立たねぇ。」そしてつづいて、土間へちらばっていた薪を拾い集めてほうりこみ、「ドレ、ちょっとかしてみな」とヒョーロクの火吹竹をとって、ブーブー吹き始めた。
ほどなくして、ぐらぐら湯が煮えたった。少しさましてからトトはそれをたらいにうつして、ワラぐつをぬぎ、素足をそこへつっこんだ。
「なァヒョーロクよ」
トトは足元から立ちのぼってくる湯気に目を落としたなりで、言った。
「何んで生きてるのかわかんねぇのに、何で死にたくねぇと思うんだろうな」
パチパチと、カマドの何で音がしていた。
「わかんね」とヒョーロクは答えた。

3

やがて冬が来た。
トトとヒョーロクはいろりばたに座ったなりで過ごした。トトは絶え間なく煙草をのんでいた。風のうなる音が、そして家が煽られてがたがたと揺れる音がしぬく日、或いはしんしんと雪が降りつもり、全ての物音を消してしまう日が続いた。風の強い日はやり切れなかった。家が飛ばされずにいる方が不思議なくらいの激しい風だった。閉め切ってつっかえ棒までした戸のすき間からも、風が吹きこんで来るのだった。ヒョーロクは恐ろしさのあまり、センベイ布団をひっかぶって、表の吹雪の雄叫びが極力聞こえないようにしていた。まるで、駄々をこねる赤んぼうがゆりかごの上で暴れているように、風はトトとヒョーロクの住む一軒家をゆさぶり続けるのであった。
風が無い日は、じわじわと雪が降り積もり降り積もり、ひたひたと飢えの足音が忍び寄って来る。閉ざされた音の無い世界で、時間が止まったまま、少しずつ手足の先から死んでゆくのを待たなければならないのだろうか。ヒョーロクは哀れ蚊の羽音のような声で、「トト、腹へった」とつぶやくのだった。こならの粉だけでは、胃ぶくろはどうにもならないのであった。
トトはたくさん湯をわかした。表の雪をすくって来れば、湯はいくらでもわかせたし、ガブガブと茶碗で何杯も飲んでいれば一時は飢えを忘れ、満腹の幸せをホンの少しではあるが味わうことができた。吹き上げられる湯気のあったかさ、グラグラと煮え立った湯のさまは、生気のまったくなくなった冬の生活に、何がしかの生命の息吹きのようなものを思い出させるようにも思えた。しかし、それもまた、もの哀しいあがきであった。茶腹も一時と言うように、ふくらんだ腹はすぐにまたしぼんでしまうのであった。また、湯でダブダブになった腹の中の気持ち悪さと、満腹感とはやはり別物だった。程なくしてトトとヒョーロクは、湯を飲んだ後、腹部の憂鬱な満腹感と空腹とを同時に感ずるようになった。ただ、盛んに小便が出るだけであった。
飢えが迫っていた。石うすの中のこならの実も、わずかなものとなっていた。すき間風といっしょに死神が入って来て、ガリガリとヒョーロクの膝小僧をかじった。冬には終わりがないように思えた。

「トト、腹へった」
ヒョーロクはやつれた顔を床へおし当てて、何度もそうつぶやいた。くり返しくり返し、そうつぶやいていた。言ってもどうにもならないとはわかっていても、言わずにおれなかった。言っても気は紛れず、それどころか却って空腹に拍車をかけるとはわかっていても、言わずにおれなかった。ものが、考えられなかった。考えられない頭に浮かんだのはただ一つ、この言葉だけで、それをひたすらにヒョーロクはくり返していた。「トト、腹へった」そしてそれを日がな一日傍らで聞かねばならないトトは、ただもう、やる瀬なかった。
そんな風にして一日、また一日と、過ぎていった。
そんなある日のことだった。雪が特別たくさん降った日だった。ヒョーロクはおちくぼんだ目でトトを見ながら、「トト、腹へった」と際限なくつぶやいていたが、とうとう「ヤカマシイ！」と一喝され、泣きそうな顔で横になっていた。が、何を思ったかムックリと起き上がり、「トト、わしにもちょっと、そのキセル吸わしてくれェ」と言った。
もう1度トトは怒鳴り声を上げそうになったが、グッとこらえた。気持ちが静まると、今度はたまらなく、ヒョーロクを可哀想だと思う心情が湧き上がって来た。余程、腹をすかしてのことだろう。トトは腹の足しになぞならないだろうにとは思いながらも、「ほれ、あんまり吸いすぎんようにせぇよォ」と言って、キセルを放ってやった。
ヒョーロクは一吸いするなり、ケンケンとむせび返った。辛くて苦い煙が、空っぽの胃ぶくろにしみた。咳きこんで生ツバを吐き始めたヒョーロクを見て、トトは大あわてにあわててキセルを取り上げ、「こん、大バカ者奴」と怒鳴りつけた。
根かぎり咳をして、ヒィーッ、ヒィーッとか細く息を吐いていたヒョーロクは、やがてボタボタと泪を落とし始め、そして突然火がついたように泣き始めた。くやしかった。情けなかった。悲しかった。腹へった。そうしたすべての思いがごちゃ混ぜになって、カンシャク玉を爆発させた。
トトはそんなヒョーロクをジッと見ていたが、やがて、意を決したように立ち上がった。いや――正確に言うと、意を決して、立ち上がった。ヒョーロクは、その父の表情を、読み取ることが出来なかった。
「待っとれ、ヒョーロク」
そう言い残して、トトはコオトを羽織り、猟銃をかついで、真っ白な表へと出て行った。

4

それから日も傾むこうかという頃、トトは頭垂れて、とぼとぼとしんどい山道を歩いて引き返していた。トトの羽織ったコオトは降りつもった雪のせいで真っ白になっていて、提げた鉄砲は弾がこめられたまんまである。トトはその筒先からきなくさい一すじの煙を昇らせることもなく、手ブラで帰り道を歩いていた。
トトは里を下りて、盗人になるつもりであった。そして又場合によっては、人殺しになってしまうことも覚悟のうちであった。農家の倉へ忍びこめば、少しは米が手に入るだろう。そうだ、農家は米の出来が悪かった悪かったと言っていたが、売る分が無いだけで、自分たちで喰う分はシッカリとつかんでいるに違いない。そう考えるとトトの胸のうちにはムラムラと言いようのな

い怒りがこみ上げてくるのであった。まぶたの裏へ、腹が減ったと泣くヒョーロクの小さくちぢこまった姿が浮かび、それがかき消されて、幸福な農家の食卓の様子がアリアリと映し出された。その中で、憎々し気な太った子どもが、茶わん山もりの白米をほおばっていた。

そんな頭の中の風景に、トトは激しく憤り、やがてその憤りは山奥で飢えて死ぬより仕方のない生活を送ることを自分やヒョーロクに強いている世間の不条理への憎しみにまで膨らみ、さらにその膨らんだ大きな憎しみがそのまま再び農家の人々に向けられた。

悪いことなんかじゃねェ。トトは自分に言い聞かせた。生きるために、やむを得ないことだ。おれがこの鉄砲でだれかをズドンと撃つことより、あったかい寝床で眠れる人と冷たい寝床で寝なきゃなんねエ人とを同じ地めんの上へ並べて平然としているお天道さまの方が、よっぽどむごたらしいわェ・・・・・・。と言いつつもトトのひざがしらはガクガク震えていた。それは雪と北風のせいだけではなかった。

トトは村へ到着し、その中を四、五へんぐるぐる歩き廻った。息はふるえ、鉄砲の重たさのみが奇妙な実感をともなって存在していた。あの家になぐりこもう。いや、そっちの家の横の倉へ忍びこむか。いや・・・・・・。しまいにトトはへたりこんだ。フン切りが、つかなかった。やはりおれは悪いことをしようとしとるんじゃアねエかのう・・・・・・そんな風にすら思えて来た。

と、ふと、トトの耳にある音が聞こえて来て、ハッとした。その音はほうぼうの家から聞こえて来た。かじかんでシビレた耳の中でも、それはハッキリとひびいた。鉄砲の重さといっしょに、トトへのしかかってきた。それは、農民たちが、こならの実をひくために、石うすを回している音である・・・・・・。

なんだァ。トトはへたりこんだなり、灰色の空を見上げた。ここでもこならを喰ってるっちゅうこた、やっぱり米が少しもねエんだなァ。へへへェ・・・・・・。

・・・・・・みんな腹を空かせてんだ・・・・・・。

どこからか、赤んぼうの泣く声が聞こえて来た。今にも消え入りそうな、弱々しく、シャガレた泣き声だった。あァここにもヒョーロクが居る・・・・・・トトはそうつぶやいた。

空はどこまでも灰色だった。トトは真っ赤にしもやけてふくれ上がった手の甲をすり合わせた。

―帰ろう。

そしてトトは来た道をもう一度歩きはじめた。

ザッと、物音がした。

トトはびくっとして、鉄砲をかまえた。ここはほの暗い山道の途中である。物盗りか、山賊か。トトの心臓は大きく波打った。

だがそれは物盗りでも山賊でもなく、それ以前に人でなかった。木かげから出て来たそれを見てトトは思わず息をのんだ。

それは今まで見たことがない程に美しい、一頭の牝鹿であった。毛皮は降りしきる雪よりも白かった。すらりとした体?は気高さとやさしさにみちあふれていた。そして黒目がちの眼は、トトにたまらない哀しさと、たまらない懐かしさを覚えさせた。ほの暗い山中で、その鹿は照り輝いて見えた。

「お、おどろいたじゃアねェか」トトは言った。「さァ、行けよ」

しかし鹿は動かなかった。まっ黒い眼で、ジッとトトを見つめて、立ち去ろうとしなかった。
「行けってば」とトトは言った。しかし鹿は微動だにしなかった。
トトは鉄砲をかまえたなりだった。指を引き金にかけてさえいた。もし――と、トトは思った。もし、ここで指に力をこめたならば、こめたならば――わしもヒョーロクも、飢え死なないで済む――でも――。でも――。大きな力が、トトをおさえつけていた。村に伝わる、あの言い伝えを恐れたためではない。その時のトトは、そんな幽霊伝説など、頭になかった。ただ―その鹿の黒い眼が―トトを凍りつかせていた。それは狂おしいまでにトトの心をかき乱した。喜怒哀楽のどれにも分類できない、得体の知れない感情がトトの中に渦巻いていた。トトは、自分のほほが焼けるように熱いことに気がついた。いつの間にか、トトの両目から、泪があふれ出ていたのだった。どうしたことだ―どうしたことだ―金しばりにあったかのように、トトは立ちつくした。
――だめだ。撃てねぇ――
トトはそう思った。
その時である。
――お撃ちなさい――
トトの心の中でそんな声が聞こえた。
トトはドキリとして、鹿を見た。もう1度、今度はよりハッキリとなった声が、トトに聞こえた。
――かまいません。お撃ちなさい――
トトの中を、今までに見たものすべてがぐるぐると回り出した。森羅万像が吹雪のようにトトを走り抜けて行った。そして最後に、いろりばたに座りこんで待っている、ヒョーロクの姿が見えた。
トトは泣き叫びながら、引き金をひいた。
ズドンという音が、山の中へひびきわたった。
まっ白な地面が、赤くそまった。
そしてまた、うそのように静かになった。

5

「帰ったぞ」
トトの声がした。
ヒョーロクはカマドの前へ座りこんで、懸命に火吹竹を使っていた。「アッ、トト」ヒョーロクは振りむいて、目を丸くした。持っていた火吹竹を、取り落とした。見たこともないほどに白く美しい鹿を背負ったトトが、戸口に立っていた。
「どしたんじゃ、そのシカ」
「あァ、山でしとめた。さァ、喰おうでぇ。これで何とか命ァつなげるでェ」
「でもトト、雪の日に畜肉ァ…」
「うれしかろう腹一杯喰えるのァ久しぶりじゃろうが」そう言ってトトは上がり口へどっかと座りこんだ。「おッ、湯ゥわかしといてくれたんか。気がきくの」
「トト」ヒョーロクは半泣きになって、言った。「畜肉喰ったら、幽霊が出るで」

「かまうもんかぇ」トトはワラぐつをぬぎ、肩につもった雪を払った。
「いやじゃ！」ヒョーロクは叫んだ。「死ぬなァ、いやじゃ！」
「なァヒョーロクよ」トトはかじかんだ足をもみくだしながら、諭すように言った。「このシカを喰やァ幽霊が出ちまうし、喰わなけりゃ飢えて死ぬ。どっちにしてももう終わりじゃ。どうしたって死ぬより仕方がねぇ。そんなら、どうせ死ぬなら、腹一杯で死ぬ方がえェ。な。最期くらいは、うまいもんを喰おうで。な、な。」
結局、ヒョーロクが折れた。トトはそのシカをさばいて、あったかい肉汁をこさえた。あれ程恐がっていたヒョーロクも、いざうまいものを鼻先へつきつけられると、矢も楯もたまらずガツガツとむさぼり喰うのだった。ナベいっぱいに煮立った肉汁は、アットいう間になくなった。トトとヒョーロクは、はち切れんばかりの腹を抱えて、フウと大きく息をついた。「うまかったなァ」と、トトが言った。「うまかった」と、ヒョーロクも答えた。
しんしんと、雪が降っていた。
腹の苦しさが少しずつましになってゆくのにつれて、じわり、じわり、と恐ろしさが家の中へしみこんで来た。「なァトト」とヒョーロクが言った。「いつ、幽霊は出るのじゃろうか」
「さァナァ、トトはキセルの灰をポン、と落とした。「いつかの」
ヒョーロクは恐る恐る天井を見上げた。フイに、薬売りの話を思い出したのである。天井には、何もなかった。ヒョーロクはホッと胸をなでおろした。と、そのすぐ次の瞬間、物音がした。
「ギャッ」ヒョーロクは叫んで、飛びのいた。
「どした」トトはびっくりして、中腰になった。
「へ、ヘンな音がしたんじゃ」ヒョーロクは腰をぬかしていた。
「バカタレ、ありゃあ、屋根から雪がすべり落ちた音じゃ」トトは声を荒げた。「ビクビクすんじゃねェ」
しんしんと、雪が降りつもっていた。
ヒョーロクはいろりばたに、ヒザを抱えて座っていた。トトは難しい顔で、スパスパとタバコを服んでいる。おそろしいまでに、静かだった。ヒョーロクは、何でここまで静かなんじゃろう、と思った。雪ははげしさを増すでもなく、さりとて止むでもなく、しんしんと降り続けていた。一塵の風が、戸のすき間から吹きこんできた。ヒョーロクは思わずブルッとふるえて、センベイ布団に手をのばした。その時だった。
・・・・・・・？
何とも形容できぬやわらかなあたたかさが、ヒョーロクをつつみこんだ。その熱はいろりのものではなかった。そのあたたかさは、どこか懐かしく、もの哀しく、ヒョーロクをつつみこんだ。不思議だった。ヒョーロクは体中からスッと恐怖心が消えて行くのを感じた。そして、耳の奥で何かがかすかに聞こえることに気付いた。
・・・・・・・・。
ヒョーロクはあたたかさにつつまれたまま、目をとじた。そうして、より一層深く、その不思議な感覚の中に身をうずめた。しばらくして、もう一度、聞こえた。たしかに、聞こえた。
・・・・・・・ヒョーロクや・・・・・・・。
「トト」静かに、ヒョーロクは言った。「カカの声がする」
「何じゃと」トトはキセルを取り落として、またぞろ中腰になった。「バカ言うじゃねぇ、お

前えのカカは――――」
トトの動きが止まった。
表の雪の白が月の光を反射して、ぼうと光った。
「聞こえたか」ヒョーロクは尋ねた。
「――聞こえた」トトは答えた。
しんしんと、雪が降っていた。
トトとヒョーロクは、その不思議なあたたかさに身をうずめて、ジッとしていた。
「聞こえた」
いま一度大きくうなづいて、かみしめるようにトトが言った。
山はますます、白くぬり上げられていくようだった。

雪が溶けたら、とヒョーロクは思った。雪が溶けたら、山も里も、このあたたかさでいっぱいになるだろう。そうしたら、このあたたかさの中を歩いて、カカの墓参りに行こう。そして、カカの霊前に、一輪の花をたむけよう――。
きっと、トトも同じことを考えているに違いなかった。

しんしんと雪の降る、静かな夜のできごとであった。

（二〇〇四年十二月十九日）

自殺志願　　*Starship Trooper*

1

プルルルルルル
ガチャリ
「もしもし」
「もしもし。タカハシ君？」
「はい、そうです」
「私。わかる」
「・・・キク？」
「正解」
「・・・こんな時間にどうした」
「これから飛び降りるの」
「ハ？」
「これから投身自殺をするのよ」
「ハ？」
「もう一ぺん聞き返してきたらぶっ殺すわよ。いい？今私は駒犬山にいるの」
「駒犬…あァ、昔遊園地があったところな」
「そうそう。今、観覧車乗り場から（電話を）かけてるの。それにしてもペンキはハゲてるしサビついてるし、閉鎖されちゃった遊園地って哀しいわね。
　ま、それはさておき、これから三十分以内に駆けつけてくれたら、思いとどまってあげる。もし来てくれなかったら、私はフェンス乗りこえて、観覧車によじのぼって、身を投げてやる」
「・・・・」
「いい？」
「よくない」
「グッド。じゃ、待ってるよ」
「ちょっと待て」
「何？」
「・・・・ちょっと待ってよ」
「何よ」
「バカはよせよ」
「嫌」
「何で死ぬんだ」
「死にたいから」
「だから、何で」
「死にたいから死にたい」

「・・・・。」
「ＯＫ？じゃ、頼むよ」
「・・・・オレなんかよりも彼氏に頼め、こんな深刻な事」
「彼氏なんていない」
「そうだろな」
「ぶっ殺すよ」
「ぶっ殺すって……。オレはまだ死にたかないよ。心中はごめんだね」
「とにかく私は決心したの」
「またどうせ本気じゃないんだろ？」
「今度こそ本気。だから、早く止めに来て」
「さっさと帰って歯ァみがいて寝ろ。カゼひくぞ」
「・・・・。」
「・・・・泣くなよ」
「バカヤロウ」
「なんだそりゃ」
「何よ！」
ガチャリ。

風呂に入ろうとして脱衣所にたたずんでいた時、出しぬけにかかってきた電話に出たら、このざまである。僕はツー、ツー、ツーとつぶやき続けている電話機を握りしめたままで「あの大バカ者」と頭垂れた。僕のささやかなプライベートタイムを誰かが奪ってよいなどということは、絶対に無いはずである。しかし――――
「あの大バカ者」
僕は脱ぎ散らかした服にまたぞろ袖を通して、コートを羽織った。
駒犬山までは、途中で事故でもしなければ、ぎりぎり３０分で行けそうだった。

2

車を降りた僕は外の空気があまりにも冷たいことに驚いた。吐く息の白さったらない。ことによるとキクが死ぬ前におれの方が心臓発作でも起こしちまうやもしれない、と思った。ぼろぐつの下で草のすれる、いやな音がした。あの野郎め。僕は咳をする要領でそうつぶやいた。
空に近いだけあって、見事な星々が見えた。僕はそれを見ながら歩き、がために、何度も穴ぼこへ足をつっこんでつんのめった。あァ間抜け、ぶざま。やってられないよ。歯と歯がぶつかり合う、カチカチという小刻みの音が僕の頭蓋骨の中で響いていた。
ここからは歩いてゆくより仕方がない。僕は鉄柵にしがみついて、勢いをつけてヒョイと乗り越えた。ちょいとばかし着地をしくじって、ドサリと無様に尻から落ちた。しかし、生い茂った背の高い草が尻の下でつぶれて、さほど痛くなかった。僕はムックリ起き上がって、体のあちこちに付いた枯れ草を払った。そして、足元へからみついてくる強靭な草々を、なぎ倒しなぎ倒しして、時にはなぎ倒されつつ、大股歩きで前進して行った。

ここは駒犬山の頂上付近である。十年ちょっと前、バブルももうはじけようかという間の悪い時期に、間の悪い企業がここに巨大な遊園地を作った。開園と同時にバブルは崩壊した。大赤字、収益見込めず、元も取れず、企業は倒産、かくして遊園地は休園。現在まで買い手もつかず、そのまんま鉄柵がはりめぐらされ（僕が先程突破したのはまさにこの鉄柵である）「立ち入り禁止」のビラを貼られて、放置されている。最近ではアトラクションの機械にガタがきていて、いつぶっ壊れるかわからない危険な状態となっていて、早期に取りこわしをする必要にせまられている。（とケーブルテレビのニュースで醤油顔のキャスターが言っていた）

さてそんな哀しい駒犬山に呼び出された哀れな男、それが僕である。呼び出した非人道的な女、それがキクである。社会が悪いのか時代が悪いのか、何の因果でこんな破目に。

眼前に広がる曲がりくねった鉄クズの砦、それが痛ましかった。さびだらけのジェットコースターのレール。動かない、首のもげた回転木馬。ホコリまみれのコーヒーカップ。鼻のとれたピエロの人形。看板の落ちたお化け屋敷。草の生いしげった巨大迷路。かつてはこの上なく毒々しいポスターカラーでぬり上げられていたであろう夢の世界の乗り物たちは、歳月の重みでペンキがはがれ、その明るさもくすみ切って、まるで墓場のような空気をまとっていた。まったく何の音も無かった。やり切れなかった。まったく何一ツ動いていなかった。やり切れなかった。時が断絶していたかのようだった。いや、事実、そこでは時が断絶していた。

たしかこっちに、と僕は重たい足をひこじって行った。たしかこっちに乗り場があるはずだ、観覧車の…。回転木馬のわきを通り過ぎ、コーヒーカップをすり抜けた。吐く息が白くてほほが痛かった。

あった。やはりこっちであっていた。「観覧車のりば」という花文字の看板が見えた。それといっしょに、その看板にもたれて空を見ている一人の少女の姿も見えた。僕は歩みを速めた。

キクは空を見上げたなりで、小さく白い息を吐いていた。こんなにくそ寒いというのに、TシャツにGパン、防寒用としてはうす手のカーディガン一枚を羽織っているだけだった。左手首にはリストバンドが巻かれていて、これはキズを隠すためである。右手と左足のホータイ、これはこの間発作的に窓から飛び降りた時にねんざしてしまったために巻いてある。少々やつれているのは食っては吐いてばかりいるためと、毎晩睡眠薬を飲みすぎているためである。キクは僕を見つけると笑って「おう」と手をふった。僕がだまって少しく不機嫌な顔をしていると、「何ムスッとしてるのよ。まァ、座りなよ」と明るく言った。

「オレはこんなこと付き合ってられる程ヒマじゃないんだよ」僕はブツクサ言った。

「でも言う程忙しくもないでしょ」ことも無げにキクは言って、ビニール袋をかかげて言った。

「夜食食べよ、夜食」

「夜食？」僕は訳がわからず、問い返した。

「サンドイッチよ。二人分あるからあなたも食べなさいよ」

「遠慮しとくよ」僕は呆れたというより半ばあきらめに近い心情を抱いて言った。「ものが喰えるような気分じゃないし、それに――」

「それに何？」

「――お前がそのサンドの中に何か入れてるかもしれないからな。」

キクは吹き出した。「ヤダねぇ。あんたと心中するつもりは毛の先ほどもないわよ。ホラ、行きし

なにセブンイレブンで買ったヤツだから、殺虫剤も青酸カリもネコイラズも入れてないわよ」
一体これから自殺しようとする人間のすることだろうか――そんな風に思いながら僕は渋々キクの横へ座って、シンと冷えたハムカツサンドをかじった。キクの食欲は極めて旺盛であった。二切れとも食べ終えると、彼女はヒザにこぼれたパンくずを払って、ビニール袋からボジョレ・ヌーボーの瓶を取り出した。（その頃セブンイレブンではノボリを立てたりなぞしてボジョレ・ヌーボーのキャンペーンを派手にやっていた）キクはポンと栓を抜き、真夏にコカコーラでも飲むような要領でグイグイとラッパ飲みした。
「急性アル中で死んじまうぞ」
「かまわないよ」またたくまに、カラッポである。「全然かまわない」そしてそのカラッポのボトルを高く高くかかげて、おたけんだ、「地球上すべての酔っ払いどもに幸あれ！」

喰い終わって、特にこれと言ってしゃべることもなく、あるいは、口をきくような気分でもなかったがために、僕はだまりこんだ。はるか下界には色とりどりの家の灯と車のヘッドライトで出来た光のオビが見えた。まいったなぁ、と僕は思った。おれは、あんなところへ住んでいるのか。まるで、下手くそなジオラマのような有様だ。少しだけ空に近いところへ居るので、そんな気分になるのかもしれなかった。胃ぶくろが、サンドイッチが入った分だけ重くなったのを感じた。少し酒くさくなったキクの息が、たえず肩にかかっていた。なんだか怒る気にも帰る気にもならなかった。
「なんで下の方ばっか向いてるのさ」キクが言った。
「さァ」と僕。
「上向いてみなよ、一分間でいいからさ」とキクは僕の右腕を引っぱった。全くおかしな女だ、と思いつつも、言われた通り上を向いた。おおかた、僕がこうしている間に、僕の靴紐をほどいてからかったりなんぞするつもりだろう。阿呆め。そうして、僕は上を向いていた。降るような星空というのは、こんな空を言うのだろう。まばゆいばかりの、光のちらかり具合だった。
と、視界のはしっこを、何か動くものが通り過ぎていった。おや？今のは何だ？そう思って目をこらしていると、また何かが飛んだ。一体何だ。三回目の飛翔でやっとわかった。子どもがなぐり描いたような金色の線が、忽然と虚空へあらわれ、そしてすぐに消えた。
流れ星だった。
「見えた？」とキクが言った。
「見えたよ」と、僕は声をはずませて答えた。「流れ星だ！」
キクは満足気に笑って、言った。「今日は流星群の日なのよ」
そういえば今朝テレビでそんなことを言っていたような気もする。何でも百年だか二百年だったか、いやもっとそれ以上か、に一ぺんの流星群なのだそうだ。これがウワサの、人生に一度の流星群か、と僕は間抜けなことを思いつつ、神様が夜空へ絵筆をふるうさまをとくと見物していた。一分間に三、四個は流れる大サービスだった。こいつはなかなか見ものだ。しかも少々寒いが、こんな見晴らしのよいところで見られるとは本当にラッキーだ。ブツクサ言いつつも来てよかった。
・・・・・・ふと、僕の頭の中に一つのアイディアがひらめいた。
「なぁ、キク」と僕は言った。「お前ひょっとして、これを見せようとして呼び出しを」

「さァね。ホラ、早くお願いごとをしなさい」とキクは笑った。

いくつ願いごとをしただろう。キクは両手をあわせて、一心に何事かお願いをしていた。何だかとてもいじらしかった。こいつの願いが全部かなって、もう死ぬマネなんぞしなくともすむようになりますように。僕は最後に、そんな風に星に祈ってみた。

「あァ、カゼひきそう」
「当たり前だ。この寒さじゃ。」
僕とキクは、大きなくしゃみをくり返しつつ、帰途についた。それにしても、キクはあの体でどうやってフェンスを乗りこえたのだろう、と思っていたのだが、何のことはない。一ヵ所、大きな穴のあいている部分があったのだ。しかしその穴は僕には少し小さすぎたので、僕はまたぞろ忍者のごとくフェンスを飛びこえ、無様に尻もちをつかねばならなかった。
「わりかしいいね、あの展望台は」とキクが言った。
「あァ。しかし、展望台というかな、アレを」
「お正月にはまたあっこに行って、初日出みようよ」
僕はどきっとして、後じさった。「また、身投げするとか言って呼び出すつもりかよ」
「さァね」キクは楽し気に言った。「そうかもね」
「カンベンしてくれよ」僕はへたりこんだ。

でもまあ、ということは、とにかく正月までは、死なないでいるつもりなのだろう。

少しだけ、安心した。

（二〇〇五年一月一日）